
童貞じゃられない

ヒロヒト.JJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

童貞じゃられない

【Nコード】

N5276K

【作者名】

ヒロヒト・JJ

【あらすじ】

別にモテない男でもなく、それなりに二枚目で誠実。そんな男がなぜかある事に関してだけタイミングを逃して生きてきた。彼女はいる。結婚話も順調に整い、その男の抱える問題はただひとつ。それは男として重要なことであり、プライド且つメンツの問題でもあった。徐々に焦り始める主人公。そう、彼にとって一刻も早く経験しておかなければならないことは、結婚するまでにはどうしても童貞を捨て去っておくことだった。

プロローグ

その男はなんとも不思議なヤツだった。

でもそれはあくまで総合的に見た場合であつて、突然突拍子もない行動をするようなイカレた人間というわけでもない。

かと言つて、謎めいている不思議さとはまた意味合いが違つ。

超能力があるわけでもないし、もちろん霊能力でもない。

むしろ“意外な男”という方が正確かもしれない。

男たるもの、常に女をリードしたいもの。

それがたとえ、めちゃくちゃDSな女であつたり、恐妻であつたり、男をクールな目で見る女であつたり…

あるいは巨漢、マツチヨ、力づくではとても歯が立たないような女であつたとしてもそうだ。

男女平等社会とはいつても、男にはなにかしら女の上に立とうとする妙なメンツがあるもので。

知りもしないことを知つたかぶりをするのもその一例。

ちよつと知つてることでも、全て知つてるつもりで話すことなどしばしば。

そんなこと、見透かされてることも気づかずに。

要は自己の経験豊富さを訴えたいわけであり、ある意味、女性からリスpektされたい願望があることは正直否めない。

でもそれはあまりにも浅はかであることに気付かないのが男。

昔から“男はバカで単純な生き物”と言われる由縁がそれ。

今までにもドラマや小説でどれだけ女にこのセリフ使われてきたことか。

特にホームドラマにはうつつつけかもしれない。

そして当然のことながら、このつまらないメンツが仇になる。

これはまさに、そんな男の冴えない人生を振り返りながら描いてゆくプチ・エロコメディな物語。

第1章 彼にまつわるストーリー 1話 なんなんだコイツ

1990年（平成2年）

結婚式の二次会とはあくまで名目で、この状態は明らかに同窓会と化していた。

でもそれで何の問題もなかった。披露宴で酔ったままの勢いでハシゴするのは当たり前。

26歳ともなれば、ある程度は同級生の結婚式に出席する場数も増えた。

飲む理由があれば何だっていい。新郎も新婦もこの場にはいらない。

そう…そのはずだった。そうあいつにも言っておいたのに…

「すまんすまん。遅くなっちゃった」

ヤツは一人でやって来た。別に待ってもいないのに、謝ってる理由がわからない。

「内海、来なくていいって言ったべ！」

ヤツは見え透いた愛想笑いで、周囲を見まわしながら言う。

「いや、やっぱ顔出ししておかないと思うってさ」

当然そこにはツツコミも入る。

「そんじゃ何で嫁さんは来ないんだ？」と。

「疲れたから休みたいて」

「一人じゃ顔出しの意味ねえじゃん。戻って一緒にいてやれよ」

「まあ、そうしたいのはやまやまんだけど…」

「俺たちに気を遣うな。勝手に飲んでるだけだから。お前がいなくても何の問題もない」

「ツレないこと言うなよ。せっかく来たんだからちよつとここにい

させてくれよ」

そう言って仲間にお酌して廻ろうとする内海。

一瞬、部屋に戻りたくないのでは？と思ったのは俺だけなのかどうなのか…

この内海剛介うつみこうすけという新郎は名前の通りとまでは言わないが、豪快で行動力があつて頭の切れも良い男。

学生時代もそれなりに人気はあつたし、彼女もいたはず。

ただ、内海は少し奥手だったような気がする。当時、俺に何度も彼女との付き合い方のノウハウを聞きに来たことがあつた。

だがそれも今は過去の話だ。こうして嫁さんを手に入れたわけだし。

「おい、内海。早く部屋に帰ってやれつて。酌なんていいから。みんなもそう思うだろう？」

この場に10人ほどいる酔っ払いの同級生たちも俺に同調した。「わかったよ。じゃあさ、あと10分だけここにいさせてくれよ。俺も少しはリラックスして飲みたいんだ」

とまあ、ヤツがそう言うならと、俺たちは席を空けてしばしの間は飲み食い談義。

内海は俺のとなりに座ってビールを立て続けに三杯流し込んだ。

「おいおい、いいのか？部屋帰ってすぐ寝るわけにはいかんだろが」

「ん？寝ちゃダメなのか？」

とぼけたことを言う野郎だ。

「白々しいぜ全く。天然のフリなんかするなよ。お前にはこれからたっぷりと夜のお努めがあるだろ。一番のお楽しみだろが」

それを聞いていた同級生らもヒューヒューと言葉であおつた。

そんな冷やかに、内海が思わずむせる。

「ハハハハ。もういい年なんだから、むせるこたあねえだろが。純

情少年じゃあるまいし」

酒のせいかな何なのか、顔の赤くなった内海が今まで見たこともない苦笑いをした。

「お楽しみって言っなよ。エロいなあ…」

このとき、ヤツの表情がひきつったように見えたのは錯覚ではなかった。

その理由が明らかになるのはこの場を離れてからのこと。

「水野、おい水野昭信^{みずのあきのぶ}」

「フルネームで呼ばんでもわかるわい！」

「ちよつと来てくれ」

内海が俺をどこかに誘おうとしてる。

「お前の部屋なら行かねえぞ。残念だが」

「アホ。トイレだ。残念言っな」

「何でお前と連れションしなきゃならんのだ？」

「いいからちよつと…」

げんな表情で他のメンバーから見送られながらトイレに向く俺と内海。

幸いと言っているのかどうか、男子トイレには誰もいない。

有線放送が耳障りのない程度な音量でスピーカーから流れている。オヨネーズの麦畑だった。

「おらに話でもあるのか？」

「オヨネーズのマネしなくてもいいから（――…）」
「わかった？」

ちよつとふざけてみたが、内海の顔は真顔だった。

「水野。よく話があるってわかったな」

「普通わかるわ！で、一体なんなんだ？」

「うん……実はな」

「おう」

「とりあえずションベンしよう」

「（ノ―ω―）ノバタッ」

結局のところ、連れションするのには間違いなかった。

（続く）

2話 聞こえたから聞いちゃった

五人分ある男子トイレの一番奥で、俺は用を足していた。

酔っぱらったまま夢うつつのまま便座に座っていたもんだから、体が横に倒れてタイルの壁にゴツンと頭をぶつけた。

「ッテーッ！」

一発で目が覚めた。頭をさすりながら腕時計で時間を確認する。

「ゲッ！Σ（・ω・；）——もう二十分もここにいる！」

別に急ぐ理由はないけれど、ここでケツを丸出しにして座っていても体が冷えるだけ。

事実、今自分のケツを触ってみるとかなり冷たい。すぐに出よう。そう思った矢先、聞き覚えのある声が徐々に近づいてきた。

その声は男二人。顔は見なくても誰なのかはすぐにわかった。

水野昭信と、今日の結婚式の主役である新郎の内海剛介。

何も隠れて聞くつもりはなかったが、つつい聞き耳を立ててしまっ俺。

やつら二人の会話は途切れることなく、連れション中も続いている。

俺のケツも徐々に冷えてゆくのに、ここでズボンを上げると絶対音でバレる。

天井のスピーカーから“麦畑”が微量に聴こえてはいるがその程度。

自然に出てゆけば済むことなのに、何が俺をそうさせたのか？

そう。やはりそれは内海と水野の会話の内容が俺をそうさせたのだ。

「なあ水野。実は俺よお……」

「ん？」

「…俺まだよお、小奈津こなつを一度も抱いてないんだ」

小奈津というのはもちろん内海の花嫁のこと。

「ええっ？ウツソ！マジで？」

「やつぱしそんなに驚くか？」

「そりゃビックリするべや。今どきそんなのアリかよ」

「アリもなにもシテナインだからしょうがないべさ」

旧知の仲だと方言がモロに出てしまうもので、場合によっては漫才に聴こえるかもしれないが、この二人にとっては至って通常の会話なのだ。

そして通常的に水野が問いただす。

「なんでそんなことになったさ？彼女が結婚するまでイヤだって言っただけじゃねえべ？」

「いやいや、そういうんじゃないんだ」

「小奈津っちゃんて、処女なのか？」

「さすがにそれは……てか、聞いたことないし^^;」

「ないなら“さすがにそれは”って言うなよ」

「アハハ(;;、A」

「じゃなんで抱かなかったのさ？」

「ん〜ん…タイミングを失ったまま今日までズルズル来たというか…」

「はあ？バツカじゃねえのお前。それでよく結婚まで話が進んだもんだな」

「プロポーズはちゃんとしたし」

「プロポーズするタイミングがあっただんなら、その勢いでガバツと抱かんかったんかい？」

「それはマズいべさ。外だし雪降ってたし」

「いや、その場ですぐヤレってんじゃないくてよ。そのムードのまま

ホテル行くとか」

「それっておかしくね？超真面目にキメた日だぞ」

「だから何だ？」

「だからその…プロポーズしてすぐに誘うのってよ、カラダ目的じゃねえかって思われるべさ」

「んなわけあるかい。初めてのデートじゃあるまいし。お前の考えはおかしい！まだヤツてないなんて信じられんわ」

「そんなにおかしい話か？大昔は結婚式まで嫁さんの顔さえ知らない時代もあつたんだぞ」

「いつの時代だよ^^；はぐらかすな」

「わりい…」

「体の相性つてのもあるじゃんか。そういうのもちゃんと確かめ合うもんだと思うけどな俺は」

「やっぱしそういうことつてあるもんか？」

「決まってるべ！エッチの相性は大事だろが！」

「じゃあ水野は女とエッチしてから付き合つかどうか決めてんのかよ？」

「そういうときもあつたさ。相性が悪かったら付き合えんし」

「俺にはわからんよ。どんな相性さ？プレイの仕方とか？」

「プレイ言つな^^；とにかく婚前交渉は大事なのさ」

「ん〜ん……俺には無理だ」

「内海、お前さ、たしか小奈津ちゃんより前に付き合ってた女だつていただろうが？」

「まあいたにはいたけど……」

「ならわかるべさ。ド素人みてえなこと言ってるじゃねえよ」

「……………」

内海の言葉が途切れた。

妙な間が数秒続き、やがて疑問符のついた水野の声が聴こえた。

俺は依然、トイレの便座で冷たいケツを丸出しにして座っている。

「内海、お前まさか……」

「なんだよ？」

「お前、ひよつとして、今まで付き合った女を一度も抱いたことないんじゃないの？」

「(○○○;) ギクウウウー！」

内海は一言も言い返さなかった。

「おい、そうなのか？冗談で言っただけなのにマジでそうなのか？」

「るせえな！そんな言い方されたら返事できないべ！」

ちよつとキレたような口調の内海。

だが今の口調で俺は察知した。きっと水野もそうだろう。

そう——彼は今現在まで、おそらく童貞であるってことが。

(続く)

3話 かつての関係

女性で残っているのは私ひとり。

さつきまではゆかりや亜紀子がいたけれど、すでに二人は子供のいるミセスだから早々に帰った。

でも居心地は悪くない。今いる男子たちとは元々仲が良かったし、ここだけの話、数人は食べちゃった経験もある（「ー」）フフ…もちろん誰に言えることでもないし、お互いが秘密厳守を保っている。

今日は特別熱い夜ではないけれど、お酒のせいもあって顔もかなり火照っていた私。

新郎の内海君と水野君が席に戻って来るのと入れ替わりに、次は私が席を立った。

お座敷を出て廊下に出ると、少し開いていた窓から心地よい風が入ってくる。

それがとてもきもちが良くて、酔い覚ましの意味もあり、私はそこから顔を出して外を眺めた。

夜景が見えるおしゃれな場所じゃないけど、今日は主人公でもないし重要なことじゃない。

私にとって結婚は束縛。それは自由の消滅であり、ややこしい気遣い人生の始まり。

だいいち、自分の一生を決めることなのに、それを一人の男に絞るなんてムリ。

まあ、こんな私の考えを一掃させるほどの影響力を持つ男でも現れたなら別だけど。

「ふんっ。結婚なんて…」

外を見ながら鼻で笑った。

そんなとき、廊下をトボトボ歩いてくる景山俊史君がそばに寄つて来た。かげやまとしふみ

かつて私が食べちゃった一人でもある。

「美緒^{みお}、どうした？」

「ちよつと酔い覚ましにね。景山君は？」

「俺はトイレから出てきたところだ」

「え？じゃあ水野君たちと一緒に？」

「んゝ、一緒つてか、一緒じゃないつてか……」

「あ、わかった！景山君だけうんこだったんでしょ？」

「ドキッΣ（・ω・；）――……いいだろそんなこと。女が外でうんこつて言つな」

「酔つてるせいよ。それよりほら、この窓から気持ちいい風が入つて来るの」

私は影山君を窓のすぐそばに誘導した。

「あ、ホントだ。気持ちいいな」

「でしょ」

「ふうゝ」

景山君は大きな溜め息に思わせるような深い深呼吸をする。

その横顔を見ていた私は、なぜか彼がとても魅力的に感じた。

学生時代よりもキリツとした男前になつてるのは確か。そして彼は今も独身。

「ねえ、もっと気持ち良くなつてみる？昔みたいに（・ー・）ムフツ」

大人に成長した景山君は、こんな私の誘惑に戸惑いもせず、むしろ不敵な笑みで堂々と私に向き直る。

「アハハ。美緒も変わんねえな。お前、どんだけ男を泣かせてきたんだ？」

「失礼ね。喜ばせて来たのよ！あなたも含めてね」

すると、彼の口から意外な言葉が飛び出した。

「さすが美緒だ。その度胸、昔と全然変わってない。内海にも少しでいいから分けてあげたいぜ」

「え？……内海君？内海君がどうかしたの？」

急に景山君が小声になった。

「いいか、誰にも言うなよ。さっきトイレの中で内海と水野の会話を聞いてちゃったんだけどさ」

「うん……ゴクッ」

（なぜ私が生つばを飲むんだろう？　^ | ^ ; ）

「内海のやつ、まだ小奈津ちゃんを一度も抱いてないんだってさ」

これには私も驚いた。

「えええ〜っ！ウツソおお？」

「しーっしーっ！デカイ声出すな」

「うつ……！」

景山君がいきなり私を抱き寄せて、ごつい手で私の口をふさいだ。

「いいか内緒だぞ。確定ではないんだ。おそらくの話だ」

「く、苦しい……」

私の呻きにハッとした彼はすぐに口から手を離れた。

「おっとごめんごめん」

一瞬の馬鹿力で窒息寸前になった私。

「もうバカっ！鼻までふさがないでよっ！」

「ワハハハ（　　）」

「ワハハハじゃないわよっ！このドSっ！」

「まあまあ、美緒のDMに免じて許してくれよ」

「あー本当に苦しかった……もういいわ。で、何の話だった？」

「内海の話さ。お前には関係ないから忘れてくれ。じゃあ俺は席に戻る。ケツが冷えたぜ全く……」

言いたいことだけ言って行ってしまった景山君。私の誘惑も無視。

でもまあ、昔からマイペースな部分は彼も変わっていない。

私は少し乱れた衣服を整えながら、景山君の言葉を思い返していた。

（内海君がまだお嫁さんとエッチしてない？）

正直、素直に信じられる話ではなかった。

お嫁さんの方が結婚するまでは……とでも言ったんだろうか？でもそれこそ信じがたい。

一番、推理できそうなことはただひとつ。それは内海君がビビっていること。

彼はワリと二枚目だし、テキパキしてるのに、あっちの方に関しては真逆なタイプ。

でも不思議。そういうことは、かつて私がちゃんと教えてあげたつもりだったのに……

そう。だって私と内海君は恋人同士だったことがあるんだもの。

（続く）

4話 カラダの相性

今日は本当に楽しかった。

内海君の結婚式も良かったけど、二次会の方がやっぱり気楽に飲める。

なんてったって、美緒とゆかりに会うのも久しぶり。

男子とも話したけど、最終的にはやっぱり女同士でガールズトーク。

昔からそうだったけど、美緒は今でもエロかった。

それを大笑いで聞いている私たちも同類かもしれないけど。

私が帰宅して寝室に入ると、旦那が大いびきで寝ていた。

その現実を目の当たりにした瞬間、今夜の楽しかった余韻が冷めてゆく。

この人がこんなに耳をつんざくほどの高いびきをかく人だとは思わなかった。

結婚する前に一度同棲しておけば良かったと、今更反省しても後の祭り。

これもみな私の不覚。体の相性が良かったばかりに……

そう。体の相性と言えば、今夜の美緒もそんな話で盛り上がっていた。

いつもマハラジャで踊りまくってる彼女も、今日はトークの中心人物。

男性陣はちょっと離れたテーブルで勝手にうかれてるからちょうどいい。

少しの間だけ顔出しに来ていた新郎・内海君が帰った後、
「これから彼、どんな初夜になるんだろうね？（・・）むふふ

」

なんて話から始まった。

美緒の心の何かに火がついたらしく、話が自分の恋愛のことに移り変わってゆくと、お酒の力も借りてエロトークが炸裂。

まあ美緒の場合はお酒がなくても同じかもしれないけど。

「ねえ、亜紀子は旦那とうまくいつてる？」

唐突に美緒が私に話をふる。

「まあまあかな。そんなにケンカもしないし」

「違うよ。夜の夫婦生活のこと（「」）ニヤ」

美緒が急に顔を近づけて小声になる。

「ヒソヒソ話するといつも顔がヤラシくなってるよ美緒」

「じゃ大声で言い直す？」

「それはやめて（^ー^；）」

美緒がちよつと身を引いて溜め息をついた。

「あゝあ、亜紀子がうらやましいわ……」

「私が早く結婚したこと？」

「いいえ、結婚はどうでもいいの。そんなに早く体の相性の合った男を見つけたことよ」

「そ、そう思う？」

「違うの？」

「まあ、相性は良かったと思うけど……」

「けど？」

ツツコミの早い美緒。前に乗り出して頬杖をついている。

「相性ばかりじゃなくて、いろいろあるのよ」

「たとえば？」

「その……義父母とか義兄弟との付き合いが難しくてね」

「なんだ。そっちの話か」

少しトーンダウンした美緒。

でも彼女に旦那の高いびきのことを話したところで、ウチら夫婦の醜態をさらけ出すだけ。

私はこうして親戚方面へと話をそらすことで、話題を美緒にふつた。

ゆかりはずっと聞き役。でも楽しそうにニヤニヤしていた。

「美緒は最近どうなの？」

「私は全然ダメ。相性のピッタリくる男なんて誰もいないわ。未だにね」

「でも美緒は今まで相当付き合ってる人いるじゃない？」

「うん。でも数打ちや当たるってのはウソね」

「選り方が悪いんじゃないの？遊び人ばかり目をつけてたとか」

「そうでもないよ。仕事が出来て性格の良い人は6人位いたんだけどね」

「それだけいたら十分なはずだけど（＾―＾；）」

「ねー」

ゆかりと私は顔を合わせて相槌をうつた。

「ダメダメ！性格が良くてもエッチの相性が合わなきゃ話にならないわ」

「それ逆じゃない？大事なのはメンタル面。性格の良い人だったら、どんなエッチだって気持ち良く……」（　　）キヤー！何言わせるのよ」

そう言ったゆかりの顔が真っ赤になっていた。

「甘いわっ！」

そんなゆかりの発言に美緒は一刀両断。

「どんなに優しい男でも、エッチがヘタなら全てオジャンよ」

「そ、そうかなあ……」

「好きな女のためを思うなら、満足させる技術も兼ね備えてるのが常識だと思わない？」

「まあ、そりゃあ……ね……」

「でしょ？ただ優しいだけなら、それはうわべだけのこと。本当の優しさっていうのは、身を満足させてくれること。それが心に伝わるの」

まさに美緒らしい言い分。けど……疑問もある。

「でも美緒、男の人だっけいきなりエッチがうまい人はいないよ。女性を満足させたい気持ちはあっても、経験不足でうまくいかない人はどうなの？」

「ん、気持ちは伝わっても私にはやっぱり無理ね」

「そうなんだ……（^ー^；）」

「エッチはリードされたいもん。今更私からあれこれ教えるのはもう疲れたし」

「え？ってことは、過去にはそんなことあったんだ？」

「あったよ。でも面倒くさくなつて別れちゃった」

「あらら……その人って誰？私たちの知ってる人？」

「それは……いずれまた教えるわ。私が今言いたいのはね、そんな童貞まがいの男の話じゃなくて、独りよがりなSEXしかできない男のこと。エッチ大好きなクセにね」

「ああ、なるほどね。美緒も苦い経験してるんだ？」

「踊りに行った帰りにはそういう男の方が多かったわよ」

「それって相手が一夜限りのことって割り切ってるからじゃない？」

「……」

「だとしてもよ！最低限のマナーってのもあるわ！例えばね……」

美緒のトークに熱がこもってきた。

この後、彼女のぶっちゃけ体験談を聞かされることになる私とゆかり。

恥ずかしいやら可笑いやら、はたまた啞然とするやらで……

（続く）

5話 恥ずかしすぎる会話

花嫁と花婿について語るのは式本番のときだけ。

二次会ともなると、単なる飲み会だから、話に本筋があるわけじゃない。

それを無理やりこじつけて語ろうとしても、話は必ず脱線する。

今だつてまさに、内海くんの思い出話から内容が大きくズレていた。

私は主に聞き役専門だけど、自分自身が話のターゲットにされないか、話がこつちにフラれたりしないかと、ちよつと不安でもある。なにせ今の話題はエッチのこと。しかもMCはあっけらかんと下ネタが言えるオヤジギャル美緒。

そついうのが少し苦手な私だけど、亜紀子が美緒にツツコミを入れるもんだから、更にトークが加速していった。

「そんなひどいエッチする人なんている？」

亜紀子が興味津津な眼差しで美緒の経験談を誘いだそうとしているのがわかる。

なんだかんだ言つて、彼女もけつこつ美緒なみにエッチな子なのだ。

「いるいる。前戯ソコソコのせつかち男なんて最低よ。私、バージンでもないのに痛くて痛くて…」

「ひえー、生々しい…（＾□＾；A」

やっぱり美緒はファジィ（あいまい）な表現ができない。

「あとね、うるさい男」

「うるさい？おしゃべりつてこと？」

「うつん、違う違う。エッチのときグダグダ言うヤツのこと」

「グダグダ？」

私にはそれがどういふことなのかピンとこなかったけど、亜紀子はこう解釈したようだ。

「もしかしてそれ『いいか？ここはどう？気持ちいい？』って聞きまくってくるのか？」

「キヤー！ッ（ノミ）亜紀子ったらヤラシィー！」

美緒がウケまくっている。亜紀子にしてもここまでオープンに聞けるのは、きつとお酒のせい。

「シーツ！向こうの男子に聞こえるつてば（ハ―ハ；）」と亜紀子。なのにそんな忠告などお構いなしにしゃべる美緒。

「まあ確かに亜紀子の言うような男もいたけどね。でもそれはそれで別にいいのよ。こっちもボルテージ上がるから」

「いいんだ……（―；）」

「うん。うるさいつてのはね、男のくせに感じる声が大きいのよ」
美緒はここで一息ついて、お冷を喉にクーツと流し込んだ。

「ええー？ウソ？美緒より声大きいの？」

「ちよつと亜紀子！私のアノときの声なんて知らないでしょ！」

「あー…そういう意味じゃなくてね、声が大きいのは普通、男より女じゃない？」

「へー、亜紀子は声が大きいんだ？（・・）むふふ」

「へ（へ）ヤダもうー！私の話じゃなくて一般論でしょ！」

とてもじゃないけど、私はもうこの二人の会話の中には入れずにタジタジしてるだけ。

「亜紀子、それはエッチビデオの観すぎ！」

「み、観てないわよそんなの…（ハ□ハ；A）」

「あんなの全部演技じゃない。視聴者の男向けにアンアン言ってるだけよ！」

「美緒はよく観てるようね（ハ―ハ；）」

「私は演技90%くらいかな」

「じゃあ演技で声出してるってことじゃない？　ハ　ハ　；」

「相性が合わないときなんかはわざと出すの。早く終わって欲しいときってあるじゃない」

「だからって演技するの？」

「そうよ。感じるフリするの。『いつちゃう』とか言えば男なんてすぐフィニッシュしちゃうでしょ」

「私は演技とかできないから…（*v・v）」と亜紀子。

「よう言っわ」

いつの間にやらタバコを啜っていた美緒が苦笑いしながら煙を吐く。

「話が脱線してない？　美緒の付き合ってた元彼の話してたはず」

「ああ、そうだったわね」

「要するに、感じてる声の大きい男は嫌いってことなんだよね？」

「そそ」

「私、そんな男の人知らないけど…例えばどんな？」

「やっぱり亜紀子はヤラシイわ（「」）ニヤリ」

「ち、違っつてば！　わかんないから聞いてみただけよ（ハ　□　ハ　；　A」

「まあいいけど。例えばね、ハアハアハアハア心不全みたいな声を出す男。体力のないエロオヤジみたいでヤだし、はうううう！　なんてのもドM男みたいでゲンナリするのよ」

「（　　）キャハハハハ　ヤダそれ、誰のこと？　ひよっとして内海くん？」

「え？　内海くん？」

亜紀子が意外なことを言った。

「私知ってるよ。昔、美緒がちよつとの間だけ内海ちゃんと付き合ってたことあるじゃない」

全く初耳の私は、ただ驚くばかりで、亜紀子と美緒を交互に見つめながら思わず口走った。

「ウソ！？私そんなの全然知らなかった。なんで教えてくれなかったの？」

「あら、珍しいところで食いつくのね。ゆかり」

「だってビックリしたんだもん」

「ゆかりに教えるまでもなかったのよ。内海くんとは2週間で別れたんだもん」

「（ノ——）ノコケツ！あらま」

「だからさっき彼がここに顔を出したとき、私にはよそよそしかったのよ」

「へー、そうだったんだ……」

「でもうるさいエッチするのは内海くんのことじゃないよ。その後につき合った男が1番うるさかったかもね」

その言葉を受けて、亜紀子が少し首をかしげながら言う。

「私は正直、そういうの平気だけどなあ。男の人のアノ声って結構好き（*^ - ^*）ゞ」

「だから亜紀子もゆかりもすんなり結婚できたのね」

「別にそんな理由で結婚したわけじゃないけど……^ - ^」

美緒が次のタバコを咥えて火をつけた。

「あゝあ、真紀がいたら私と同じ意見なんだけどなあ……」

真紀という子も私たちの同級生。彼女はけっこうクールで口数の少ないタイプだけど、なぜか男の趣味は昔から美緒と非常に類似していた。

「そういえば真紀はここに来なかったよね」と亜紀子。

「今夜は彼と待ち合わせてるんだってさ」

「（——）えっ？わざわざ内海くんの結婚式の日に？」

「真紀も今はね、アツシーを除くと13人目の彼氏なの。付き合ってた間もないから、今夜が初エッチになるって言ってたわ」

「なにそれ？内海くんの初夜に合わせて張り合おうとしてるとか？まさかね^ - ^」

「それがそうなんだって」

「（ノ―ω―）ノバタツ！なんじゃそりゃ」

「なんかね、新婚さんの初夜を想像しながらすると、自分も盛り上がれそうだからって」

「……………」

理解し難い私と亜紀子は、お互い眉を吊り上げながら顔を見合わせていた。

ここで美緒が唐突に言った。

「ねね、ひとりでするときって声出すほう？ゆかり」

「え？Σ（・ω・；――」

いきなりフラレてビクツとした私。しかもよりによってとんでもない質問。

（なんでこの場面でひとりエッチの話になるのよっ！）

とは思ってみても、ここで答えを拒否るのもカマトトぶってると思われるだけだし……

「声なんて……ひとりのときはたぶん……出てないと思うけど？」

平静を装いながらも、内心ドキドキしゃべった私。たとえ女同士でも恥ずかしさでいっぱい。美緒の反応も気になる。

「でしょ？私もほとんど出ないよ。イクときだって『んぐっ！』とか声にならない声で終わるじゃない」

「（＊ m ＊）ププツ ちょっとやめて。リアルすぎるー！」

ちようと烏龍茶を飲んでいた亜紀子が吹いた。

とてもじゃないけど、私はもうこれ以上、この会話についていけない。

と思いつつ、何気に振りむいた目線の先には、同級生の男子7名全員が目を点にして私たちを見つめていた。

「（・・・）お前ら……すげえ会話してんな
と水野くんがボソツと言った。

一体、いつから聞いてたんだろっ……

（続く）

6話 初夜便乗のはずが…

きしむベッドで有名な古いラブホ。

それでもあえてここを選ぶのは、きしんだ音で興奮するマニアックなカップルたちが多いから。

「真紀っ！俺もう……」

「え？」

そつと薄目を開けた私。

そこに見えるのは、かなり表情のゆがんだ息の荒い哲郎。

次の瞬間、絞り出したような彼の雄たけびとも言える呻きが部屋に響き渡る。

「ぐおおっ——……！」

（なんなの？この気色悪い声）

私の上にいる彼の動きが止まった。

そう、間違いなく彼はフィニッシュしてしまっている。ベッドがきしむどころの話じゃない。

「はやっ！」

と思わず口走った私。でも本当のことだから仕方ない。

息も絶え絶えに哲郎が弁解をする。

「真紀が…ハアハア…良すぎるからさ……」

そんなの全然理由になってない。

不完全燃焼になった私のこのモヤモヤは一体どうしてくれるんだろう？

そんな私の気持ちも露知らず、彼はすでに私の横で仰向けになり、気持ち良さそうに大きな深呼吸をしていた。

「ねえ、私まだ終わってないよ！ねえってば！」
一応、かすかな願いを込めて粘ってみた私。
「ごめん…もう無理。俺1回しかできないんだ」

ガ Σ—11（ ;）——1 ン！！

この瞬間、私と哲郎の決別が決定的となった。
顔はいいのに、体の相性が最低だなんて、残念だけど論外。SE
Xフレンドにもならない。

正直、今日の初エッチはかなり期待していた。
マツチヨ系だから、特に包み込んでくれるような優しさで、じつ
くり時間をかけて抱いてくれるものだと思っていた。

なのに、それがウルトラマン（3分）より悪いアイアンキング（
1分）とは女をバカにしている！

しかも幻滅なのはコイツのイク声。なにが「ぐおおー！」よ。怪
獣じゃあるまいし。

私は男の声にこだわりがある。この意見に賛同してくれるのは同
級生的美緒だけ。

そもそも男は、女を抱いてくれるときは基本、無口でいいとい
うのが私の理念。

「ああー！」だの「うおー！」だのいらない。

私が男にセクシーさを感じるのは、二人がひとつになつてからも
たつぷり時間をかけ、いよいよフィニッシュという時にちょっと小
声で「くっ…！」とか「うっ…！」とか言つて、汗が^{ほてはて}迸るせつない
表情がたまらない。

そんな男ならチラ見した一瞬だけで身悶えしそうになる。

さつき薄目を開けて哲郎を見たときの彼の表情は、鼻の穴をおっ
ぴろげたブサイクな豚。ブヒブヒー！と言わなかったただけまだマシ。
なんか人間の表と裏の顔が、SEXによって引き出されたように

思えた。

せつかく今夜は、内海君の披露宴後の二次会も断って来たのに……
せつかく今夜は、内海君の初夜に負けないように、盛り上がりう
としたのに……

私がそう思ったのは、内海君との過去を思い出していたから。
決して恋人ではなかったけれど、彼とはちょっと人に言えない秘
密がある。

彼はとってもセクシーだった。女心をくすぐる要素が備わってい
た。

それはお尻がキュツと閉まってるだとか、体つきの問題ではなく、
まあハッキリ言っちゃえば顔と声のバランス。

内海君のボイスはセクシーだし、顔の表情もイジメなくなっちゃ
うくらい好き。

ハッキリ言うと、実はイジメちゃったことがある。

もちろん殴る蹴るのイジメじゃなくて、ラブの方。

もったいぶっても仕方ないから告白すると、実は私、内海君とは
Bまで行った経験がある。

その成り行きについては未だに信じられないほど突然のことだっ
た。

でも結局彼と付き合わなかったのは、当時お互いに彼氏彼女がい
たから。

（思い出すなあ……あのときの純情な内海君（*・・・*）ウフフ
フ）

さつき私が、男は無口の方がいいと言ったのは、あくまで私自身
が受け身のとき。

でも私の方からご奉仕するときは、たくさん感じて欲しいし、声

も出して欲しい。

但し、いくら声フェチの私でも、豚や怪獣のような声は絶対NG。
内海君はあるとき、とっても可愛かった。

彼は当時、童貞だったんじゃないかな？ 変わったかな？
別に一線は越えたわけじゃないけど、彼の反応をじっくり観察してたら、それこそ身悶えしちゃった私。

その数日後、本当の彼女との本番が控えてたみたいだけど、うまくいったかどうかなんて、私には知るよしもなかった。

ただ、今日のお嫁さんとは違う人だから、今となっては過去の思い出に過ぎないんだろうけど……

（続く）

7話 そんなヤツだったはず

俺がホロ酔い気分でタクシーに乗るのも珍しい。

というのも、自分で言うのもなんだが、本来なら俺は泥酔タイプだからだ。

新郎新婦そっちのけで、同席の仲間と勝手に盛り上がり、ひたすら飲み続ける。

でも今回だけは違った。いい意味で違って良かったのだ。

俺と内海は小学校入学時からの同級生であり親友。

しかも6年間で3度のクラス替えがあったにも関わらず、常に同じクラスメイトとして過ごした腐れ縁の仲。

だが、中1から俺は他県に引っ越し、その後ヤツとは一度も会う機会がなく、音信不通になった。

なのに今回、内海は俺の居所を探し当て、招待状を送って来たのだ。

しかも小学生時代の友人として呼ばれていたのは俺ひとり。

何か特別な代表にでも選抜されたようで、嬉しさのあまりその日は酒の量が増えたものだ。

その半面、そういう理由のせいか、会場には俺の知り合いなど一人もいなかった。

誰か一人でもいたなら、いつものようにバカ騒ぎして記憶をなくすまで飲んでいたかもしれない。

だが仲間が全然いない上、俺一人で孤独に飲むにはさすがに量が進まない。

結論から言えば、さっきも言ったようにこれで良かった。本当に良かった。

十数年ぶりに会った親友なのに、酒におぼれて記憶を消してしまつては元も子もない。

そんな思いから、俺はタクシーの中で、今日の披露宴の軌跡を頭の中で辿ってみた。

ごつい体で上背のある内海に比べて、花嫁は小さくて身長差が30センチはありそうだった。

顔はアイドル系で綺麗というより可愛いと表現した方が正しい。

小学生のときからスケベな内海が、こんな純情そうな花嫁をもらうとは正直想像できなかった。

そう、俺はともかく、内海は結構オープンなドスケベだったのだ。なのに、隣のテーブルにいた高校時代の友人らしい男の口から、意外な言葉を小耳にはさんで俺は驚いた。

「なあおい、あいつまだ童貞だったっけ？」

「んなこたあないだろう。今までに付き合った女だって数人いただろうが」

「だよなあ」

「なんでそんなこと言うのさ？」

「いやさ、俺の記憶じゃさ、あいつ彼女できるたんび、いつもビビりやがつてよ、全然先に進まない奴だったからさ」

「あー、そういうこともあったかもなあ」

この会話が本当であれば、俺の知る内海とは違った人物像に変化していることになる。

確かに小学時代と高校時代を比べるのもおかしい話だが、ガキの頃の内海はビビることなど一度もなかった。

少なくとも俺の知る6年生までは。

なにせ内海はムツツリスケベではなかったから。

女子のスカートめくりは堂々とできるし、人差し指で胸ツンもや

っていた。

しかもそれは、美人女性教師に対しても同じで、担任から何度も
厳重注意をされていたものだ。

にも関わらず、本人はどこ吹く風にしか思っていなかったのも
事実である。

（不思議だなあ……途中、何かあったのかなあ？）

タクシーの中で俺は一人、小学校時代の記憶の断片をほじくり返
し、ときに思い出し笑いをしながら、忘れかけた過去へと陶醉して
いった。

（続く）

8話 それがアレだった

根っからのドスケベだからといって、必ずしも初体験が早いとは限らない。

だが内海のように、子供時代から女の子に平気でボディタッチするほどの人間が、花嫁をもらう直前まで未だ童貞かもしれないという疑惑を耳にすると、とても信じ難いものがある。

仮にヤツがエロすぎて、女子から敬遠され続けてきたのなら話はわかる。

——ん？……ひょっとしてそうなのか？

俺は小学生時代の内海しか知らない。

もしかしたら、ヤツは中学から目覚ましいほどの変態性を開花させてしまい、女子から恐れられていたのだろうか？

もっと悪く言えば、見下されて相手にしてもらえなかったとか？

いや、そんなことは決してない。もしそうだとしたら、今日の結婚式にあれだけの女性の友人など来ないはず。

しかもあんなウブで可愛い花嫁をものにできるわけではない。

まあいい。もう考えるのもめんどくさい。考えたところでしようもない。

内海が童貞だろうかんだろうが、今夜の初夜で全て解決するだけのこと。

俺はタクシーの中で、ぼんやりとヤツとの思い出を辿っていた。

1974年（昭和49年）

俺と内海は10歳。そしてヤツのスケベ心に更に火がついた頃でもある。

その頃、俺たちには兄貴と慕っていた17歳の少年がいた。その兄貴というのは、内海の家の下宿という形で住んでいる従兄で、高校へは行かずに中華料理店で見習いをしていた。

まだ小学生の俺たちに対して面倒見が良く、試作の中華を作っては食べさせてくれる優しい兄貴。

食い物で心をつかまれた俺たちは、しばらくの間、兄貴に甘えてベッタリの時期があった。

そんなある日の学校の帰り。

この日は雨ということもあって、外では遊べない状況にあった。

「白石、うち来て遊ぶか？今週のジャンプとサンデーもあるぞ」

内海が気前よく俺を誘う。

「やった！行く行く。兄貴はいる？仕事？」

「あー、兄貴は休みなんだけど、デートって言ってたからいないかも」

「えー？兄貴に彼女いるなんて知らなかった」

「最近できたんだって。俺も今朝聞いたばかりさ」

「ふうん……」

子供が別に聞いて驚くような話でも関心を持つ話でもなかった。

ただ、今日は兄貴がいないなら、中華にはありつけないと思ったくらいだろうか。

ところがどっこい、俺たちはこのあと、とんでもない出来事を目の当たりに……いや、聞くことになる。

途中から激しい雨に見舞われながらも内海の家に向き着いた俺たち。

内海の家は共働きだから、たいてい家には誰もいないはずなのに、

玄関には脱ぎ捨てられたスニーカーが二足ある。

一つはいつも見慣れた靴。もう一つはピンクのラインが側面に走っている女性もの。

子供でもすぐに想像できることは、間違いなく兄貴と彼女が家の中にいることだった。

「なあ白石、兄貴の彼女ってどんな人か部屋見に行こうか？」

理由はわからないが、急に興味を示しだした内海。

「え？ああ…でも行って俺たち何て言うんだ？」

「挨拶だけでいいべさ。『こんにちは。どうぞごゆっくり』とか『なるほど。じゃあ行くか』」

兄貴の部屋は玄関から少し離れた場所で、廊下を突き当たった左側。

俺たちはなぜか、緊張した面持ちで、すり足歩きのまま部屋に近づいた。

すると、兄貴と彼女らしい二人の声が、部屋の外に小さく漏れ聞こえてくる。

先に歩いていった内海の足がピタツと止まった。

「どした？」

「しっ！なんかヤバそうな感じ；」（「」）

「ん？なんで？」

部屋の１メートルほど手前で耳をそば立てる俺たち。

「あんっ…あ…んっ」

そこから聞こえてきたのは小学生には刺激的すぎる悩ましい女性の声。

性的知識などほとんど知らなかった当時の俺たちでさえ、これは聞いちゃいけないものだということくらいは察しがついた。

にも関わらず、俺たちの緊張が一気に高まったせいか、体が固まって一步も動けなくなった。

そんなときに部屋の中から兄貴の声。

「そろそろ学校から従弟が戻って来るからマズイかも…」

(○○○;) ギクウウウー!!

俺の頭にビビッと電流が走る。

「鍵かけてるから入って来れないでしょ。小学生なんか、あとでお小遣いあげるか遊んであげればいいことだし」

「うん…でも聞かれたらちよつと…」

「ひよつとして、もうコツソリ聞いているかもよ? (*…・*) ウフッ」

?(。。。。。) ドキイ!

俺の心臓の鼓動が大きく脈を打った。おそらく内海もそうだろう。そんな顔をしている。

「ごめんごめん。そんなわけないよね。びつくりさせちゃった?」

「どうやら兄貴もビビってたようだ。」

「あはは…ちよつとね^^;」

「心配ないと思うよ私は。その子が帰って来たからって、この大雨で何も聞こえないんじゃないかな?」

「…うん。まあ、それもそうだ」

内心ホッとした俺たち。ここから動くのは今のうちかもしれない。俺は内海に早くお前の部屋に行こうと指で合図をした。これ以上の立ち聞きは危険すぎる。

奴も同感のようで、部屋の扉に背中を向けようとしたそのとき、

妙な音が俺たちの動作を止めた。

“じゅる……じゅる。。じゅぱじゅぱ……”

兄貴の部屋の中から聞こえ始めた不可解な音。

内海が俺の耳元まで顔を近づけて囁くように言う。

「これって、ちゅーしてんのかな？」

そんな質問されたところで、同じガキの俺にわかるはずもないが、想像から察する率直な意見は内海の耳元に返した。

「いや、ちゅーじゃないべ。ちゅーだったらチュツって1回で終わるべさ」

「でもテレビドラマで観る外人はよ、チュツチュしまくってたぞ」

「どんなドラマだよ？」

「奥様は魔女」

「あーあれか。でも兄貴が外人のマネしてるわけねえべ」

「じゃあなんだよ？」

「うーん…何かアメ舐めてるみたいだよなあ？」

「ああそつか…アメかあ。そういえば朝、茶の間に母ちゃんのカン口飴があつたもんなあ」

「それだ！うん、きつとそれぞれ」

音は更に続いていた。

じゅるるる……ちゅぱちゅぱちゅぱ…

「んっ！ああ…」

でもなんかおかしい。兄貴が変な声を出している。

「内海、兄貴どうかしたのかな？」

「すっげえうまい飴だから感激してるんだべさ」

「それにしてもよ、カン口飴ってあんな風な舐め方するべか？」

「わからん。けどカン口飴とは限らんべよ。でっかいベロベロキヤ

ンディかもしれんし」

「おお！なるほど。それならわかる」

やっと納得しかけたところで再び俺たちを困惑させる声がした。

「淳平の……おいしいよ」

「んあつ……くつ……」

淳平とは兄貴の名前だ。またまた顔を見合わせる俺たち。

「兄貴の舐めたキャンディを彼女が舐めてるってことか？」

「おえーっ！きたねえじゃん」

「でもわかんねえ。兄貴がなんであんな声出してるんだ？」

およそ30秒間、真剣に考えあぐねた俺たち。そして突然ひらめいたのは内海だった。

「わかった！これはキャンディじゃなくて、アイスだ！」

「アイス？」

「うん。もしくはガリガリ君とか」

「どしてさ？」

「冷たいから兄貴は齒に染みてるのさ」

「（ノ。o。o）ノオオオオオオオオオオ」

このとき、俺たちの推理は完璧だと信じて疑わなかった。

——そう、このときだけは……

不意に部屋の中から彼女の声がした。

「ねえ、廊下から話し声聞こえない？」

ゲッ！！Σ―11（　　；）―11

さすがにもう限界だと感じた内海は、静かに立ち去るところか、

ドタバタと足音を立てて走り出した。俺も必死で内海のあとを追いかけた。

明らかに気が動転していた俺たちは、二階の内海の部屋まで一目散に駆け上がり、息も絶え絶えになだれ込んだ。

まだまだ子供で純粹だった当時の俺たち。

何にもわかっていなかったのも当然といえば当然の話。

（続く）

9話 童貞ってなに？

「あいつが俺より先に結婚するとはな…」

従弟の内海剛介の結婚式から戻った俺は、すぐに自分の職場に行く準備をしていた。

本来なら一日休みをもらう予定だったが、昨日から同僚が風邪でダウンしているため、人手不足の穴埋めをしなければならない。

洗面所で顔を洗って、酔いが覚めたか自分の顔をジッと確かめるふと、式場で剛介の友達から言われたことを思い出した。

「内海ちゃんと唇のカタチがおんなじですね」

子供の頃からよく言われてきたことから、それに対する答えはいつも決まっている。

「ハハハ…従弟だからね。剛介が俺に似てるんだよ」
もう言い飽きたセリフだ。

「あ、そうですね。内海があとから生まれて来たんですもんね」
剛介の友達は体裁悪そうに、少し離れた他の仲間の元へ戻る。

そして俺が新郎新婦の方へ向き直ろうとしたとき、不意に小声で囁かれた言葉が耳に入った。

「あのタラコくちびるは絶対好きものだよな。内海も変態ドスケベだし」

「しっ！聞こえるって」

当然俺は聞こえないふりをしたわけだが、内心は驚きを感じていた。

数年会わないうちに剛介が変態になっていたとは知らなかった。というか、そういう一面というのは、子供の頃から持ち合わせているものだから、単に俺が気付かなかっただけかもしれない。

いや待てよ

俺の脳内スイッチがフラッシュバックモードに入った。

思い返せば、剛介に悪い性教育をしたのは俺かもしれない。

それまでヤツは、何も知らないガキにすぎなかった。

いずれ年齢と共に気づくことでも、あの時では早すぎる知識だったのだろうか？

記憶の限りでは大したことは言っていないつもりだが、きっかけとしては十分だ。

1975年（昭和50年）

それは俺が剛介の家に下宿していた時代、みんなで食卓を囲んでいるときのことだった。

「ねえ、お母さん。童貞ってなに？」

、
；
”
”
；
、
（
。；
；
Ж
。
；
；
）
ブツ！

びっくりして食べ物を嘔き出したのは俺。

この日はたまたま仕事が休みで、ここの家族と晩飯を一緒に食っていたのだ。

メンバーは俺と剛介とその妹。そして父親と母親。

「な、何でお母さんにそんなこと聞くのよ？」

「じゃあお父さんでもいいけど」

「そついうことじゃないの！」

そう言いながら、母親は俺の顔をチラッと見る。

俺が余計なことを吹き込んだと思ってるに違いない。事実そうなのだから。

「そんなこと今はわからんでもいい！」

前触れもなく、威圧する大声で父親がこの場を一喝。

このあとはまるでお通夜のように静まりかえったわけだが、この件についての追及の手が伸びないで終わったことに、俺は心底ホッとしていた。

そもそもこんなことになったのは、前日の出来事が関係しているいつものように、俺が剛介に中華のまかないを食べさせている時のこと。

「兄貴がいつも食ってるアイスってなに？」

「ん？アイス？俺はあんま食べないし」

「兄貴の部屋に彼女が来たときはいつも食べてるんじゃないの？」

「食わねえよ」

「じゃあ兄貴はいつも何食ってたのさ？」

「だから何も食ってねえ……ハッ（。〇。；）」

俺はここでようやく事情が呑み込めた。やはり聞かれていたんだ…この一年近く、俺は彼女をこの家に何度も連れて来てるし、バレないはずもない。

幸いまだクソガキの剛介だから、俺が彼女とアイスを食ってるとしか思っていなかったのだ。

ならば、ここは何か食っていたことにしておこう。

せっかくそう思った矢先だったのに、剛介がぶり返すような一言を言い放った。

「兄貴もさ、彼女のオッパイとか触ったりするの？」

ここで俺が『そんなことしねえよ！』と言えば良かったのだが、こんなクソガキに対しても大人ぶりたい年頃でもあったわけで……
「いいかよく聞け。大人の男はな。女を抱いてメロメロにさせるんだ。オッパイの二つや三つ、触ってやれば喜ばれるのさ」

「オッパイは三つもないよ兄貴」

くだらないツツコミをするのもガキならではの。俺は益々大人ぶる。本当は一番大人げないことなのに。

「剛介。男つてのは、いつまでも童貞じゃダメなんだ。お前も早く彼女を作れば男の価値を上げるぞ」

「童貞つてなに？彼女ができたら童貞じゃなくなるの？」

（そうか、童貞って言葉を知らないのか。無理もない。こんなの学校では習わないもんな）

「違う。それだけじゃない。つまりその……彼女とスキンシップすることだな」

「オッパイ触ったりとか？」

「ま、まあそういうことだけど、お前も触られるんだぞ」

「ええっ？男もオッパイを？」

「バカ。男はその……チン○ンだ」

「！？エエエエ（。○。；）エエエエ！？」

「お前には早かったかな……」

「女子が男にそんなことするわけないじゃん」

驚きに満ちた剛介の顔は真剣そのものだった。

「大人になればそうなるもんなんだ」

「……………信じられない」

ここでやめれば良かったものを、ちょっと大人ぶりたかったせい

もあつて、俺は話を続けた。

小学生相手に言つたところで自慢にもならないことくらいわかつていながら。

「でもな、それだけじゃ童貞を捨てたことにはならないんだ」

頭の中が疑問符だらけの剛介が遠慮なく質問してくる。そこには本能的な好奇心が確かにうかがえる。

「童貞つていうのは捨てるもんなの？」

「そうだ。捨てないと女の子からバカにされるんだ」

「ゲーツ！それやだなあ。じゃどうやって捨てるればいいの？どこまでエッチなことすればいいの？」

ここまで聞かれると、どう答えていいのかわからない。

アホな子に限ってエッチな知識だけは一人前の奴はよくいるが、従弟として剛介にはそうなつてもらいたくはない。

「そんなの自分で調べるもんだ！こういうことはな、人に聞くのは恥ずかしいことなんだぞ」

「ええ〜っ？」

「それが大人になるまでの勉強だ。ほら、チャーハンが冷めるからさっさと食べえ！」

今日の食卓は、前日にこないきさつがあつてのことだったのだ。俺は何食わぬ顔をして部屋に戻り、万年床に寝転がる。

そして去年の大ヒット曲・山口百恵の“ひと夏の経験”を無意識に口ずさんでいた。

「お兄さん、キャンドルサービスが来ますよ」

「ハッ（。〇。；）」

回想から我に戻った俺は、剛介の成長した姿を見ながら新たな思いが脳裏に駆け巡っていた。

—— 剛介、お前はいつから変態になったんだ？

（続く）

10話 ゆで卵とお兄ちゃん

アタシがまだゆで卵の黄身が食べられなかった頃の話。

逆にお兄ちゃんはやで卵が大好きで、いつも自分で茹でては食べていた。

妹思いかどうなのか、一応アタシの分も2個までは譲ってくれる。お兄ちゃんは3個。

でも結局アタシは白身だけ食べしか食べないから、黄身を5個も食べるのはお兄ちゃん。

当時は半熟煮卵なんて知らなかったし、お兄ちゃんにそんなの作れるはずもない。

アタシが小5でお兄ちゃんが中1になった夏休み。

それはアタシがお兄ちゃんに対して初めて不審感を抱いた時代…

1977年（昭和52年）8月

アタシたち兄妹は二人とも小学生のときは同じ部屋。

けれど下宿していた従兄が19歳になるとアパートに移り住み、お兄ちゃんはアニキのいた部屋に独立した。

そのおかげで、アタシもずっと念願だった自分ひとりの部屋を持てたわけ。

そんなある日の午後のこと。

「今日俺さ、夏休みの宿題を一気に終わらせっからよ」とアタシに言う。

「なんで？夏休みまだまだ終わらないっしょ」

「バカだな。先に終わらせてあとは遊びまくる方が利口に決まって

るべ」

「へー」

さほど感心もしなかったからサラリと受け流したアタシ。
お兄ちゃんもアタシにリアクションなど求めていない。
妹には平気で言いたいことを言うだけ。

「ってことだからよ小春、今日はお前がゆで卵作ってくれや」
なるほどそうきたか。

「でもアタシ、そんなの作ったことないよ」

「女のくせに料理のひとつも作れないのかお前は！」

「ゆで卵なんて料理じゃないじゃん。クッキーとか卵焼きならできるもん」

「そんならゆで卵なんて簡単だべや。頼むわ。じゃ！」

つらつとした顔でそう言うと、お兄ちゃんはさっさと部屋にこもってしまった。

まあいいや。今は暇だし断る理由もないし…

数分後、アタシは出来上がったゆで卵を深めのお皿に乗せてお兄ちゃんの部屋の前にいた。

いやにシーンとしている。静かすぎる。もう寝てるなんてあり得ない。

いつもなら大好きなキャンデイズのカセットかけてるのに。
だからといって音楽もかけずに勉強に集中しているお兄ちゃんも見たいことはない。

小学生時代、スカートめくりやカンチョーの常習犯だったお兄ちゃん。

アタシの友達にさえも「小春ちゃんのお兄ちゃんてすごくエッチで有名だよ」と言われたこともある。

それでお母さんも学校に呼び出されたこともある。

そんなお兄ちゃんでも中学生になると真面目になるのかな？

ちよつと気になったアタシはそつとドアノブをそつと回す。鍵はかかっていない。

アタシはドア越しに顔を覗かせて中の様子をうかがう。ハッキリ言つて覗き見。

「……ん？」

アタシは首をひねつた。お兄ちゃんがいた場所は買ってもらつたばかりのベッドの上。

と言つても寝ているわけでもなさそう。そう、起きてることは確か。でも間違ひなく勉強はしていない。

それどころかお兄ちゃんは仰向けになつて、Gパンを足元まで下げている。

何だか訳がわかんないけど、この際気づかれるまでこのまま様子を見ていようというちよつとしたイタズラ心もアタシにはあつて。これは見ちゃいけない行為だとわかつたのはもうちよつと先のこと。

明らかにお兄ちゃんの両手は自分のオマタを触っている。

しかも下着の上から速い手の動きでさすつてる感じ。

お兄ちゃんは目を開けて天井を続けている。その天井には超ミニス力衣装を着ているキャンディーズのポスターが貼り付けてある。

「んっ……あっ……うっ……」

お兄ちゃんの口から辛そうな声が漏れている。

私はハッと気がついた。

（大変だ！お兄ちゃんはオチン。ンが痛くてこらえきれないんだ。きつと病気だ！）

だとすると、もう隠れて見てるところじゃない。いくらエッチなお兄ちゃんでもアタシには優しいお兄ちゃんだもん。

「お兄ちゃんお兄ちゃん！大丈夫？お母さんに電話しようか？」

突然アタシの声が聴こえたせいか、お兄ちゃんは飛び上がって驚いた。

「な、なななな何しに來たんだ小春！」

お兄ちゃんが大声でそう叫ぶ。

「え……？だつてゆで卵出來たから……」

「あ、そつか。わかったわかった。もらうもらう」

なんか慌ててベッドから降りてアタシの方へ来ようとしたお兄ちゃんだつたけど、半分ズリ下ろしたGパンに足がもつれて前のめりに倒れた。

「（＊ m ＊）ププツ。ちょっとお兄ちゃんみつともない」

本人が痛くて苦しんでるのに、思わず笑っちゃったアタシはすぐに謝った。

「ごめんお兄ちゃん。痛いんでしょう？家にあるお薬の場所知ってる？」

すぐに立ち上がってGパンを履き直したお兄ちゃん。顔が赤い。

「熱もあるんじゃない？」

アタシがそう聞くと返事はすぐに返つて來た。

「なんでもない。熱もない。早くあっち行け！」

「隠さなくていいよ。お兄ちゃん、オチン。ン痛いんでしょう？お母さんに電話……」

「わーっ——！！（；）———1そんなのいいから絶対内緒にしとけ！絶対だぞ！」

「恥ずかしい場所が痛いからって、隠してると治らないよ？」

「痛くないって全然」

「じゃかゆいの？」

「かゆくもねえって。それよこせ！」

お兄ちゃんがアタシの持っていたゆで卵のお皿を奪い取る。

「でもお兄ちゃん、我慢してる声聴こえたよ。うう…って」

お兄ちゃんの顔が益々赤くなった。

「お前、どこまで見てたんだよっ！」

「そんなに怒鳴らなくてもいいじゃん。お母さんに言うのが恥ずかしいならお父さんに言えば…」

「言わないっ！絶対言わない！そしてお前も言うな！」

「病気が治らなかつ…」

「病気じゃない！」

「ケガ？」

「ケガでもない！」

お兄ちゃんは何を思ったのか、ゆで卵の殻を剥きだした。

どうやらアタシの初挑戦のゆで卵はうまくいったようだ。きれいに殻が剥けている。

「ほらみる」

そう言ってお兄ちゃんはゆで卵をパクっと一かじりしながらモゴモゴした声で言う。

「普通はよ、痛い我慢しながらゆで卵なんて食えないだろ」

「お兄ちゃん、塩かけると忘れるよ」

「そんなのはどうでもいい……んっ！」

突然お兄ちゃんが口ごもる。

（ほら、やっぱり痛いの我慢してたんだ）

「小春！お前すげえ！」

「へ？」

突拍子もないお兄ちゃんの言葉にアタシはあんぐりするだけ。

「何が？」

「この卵、半熟だべや！俺がやっても出来なかった技をお前は…」
「それがそんなにいいの？」

「おう！あたばーよ！このトロ〜ツととろける黄身とプリプリな白身が、口の中でまったりとクリーミーな食感を味あわせるんだ」

「意味わかんない」

「だったらお前も食え」

「白身なら食べるけど、黄身が半熟ならポロンと取れないね」

「いいから騙されたと思って食えよ。ほら」

あまりにしつこいから一口ちょっとかじってみた私。

お兄ちゃんの言ったように、中の黄身がトロトロしている。

アタシはそれをチュツと吸ってから、また白身の部分をかじるすると…

「おいしー！w(*。o。*)w」

もうホントにビックリしちゃった。これならアタシでもゆで卵が丸々食べられる。というか大好きになりそう。

「だろだろ。だから俺が言ったべさ」

「うん。ホントにおいしい」

「わかったらそれでいい。もう行っていいぞ」

お兄ちゃんは軽くそう言うけど、アタシはごまかされやしない。

「お兄ちゃん、痛くないなら何してたの？」

「……………」

お兄ちゃんはアタシを見ながら苦笑い。アタシは至って真面目。

2個目の卵の殻を剥きながらお兄ちゃんが言った。

「小春に言うのはまだなあ…」

「なんのこと？」

お兄ちゃんは2個目の卵を食べ終わるまで無言。アタシはずっとお兄ちゃんの言葉を待っていた。

やがて――

「小春、お前はよ。結婚したいって思うか？」
「……は？」

（続く）

11話 ヘンタイの証明？

結婚式の二次会は内海家。親戚だから仕方ない。

主役が学生時代の友達ならもつと気楽なお店でワイワイやるんだけど。

まわりは年に一度、会うか会わないかの叔父さん叔母さんばかり。年齢が近いのは従兄の正人アニキだけど中華店の仕事に行っちゃったし。

あとは剛介の妹の小春ちゃんだけ。彼女とは普段話す機会はあるけど仲は良い。

私より五つ下の二十四歳だけど可愛い妹分のようなもの。

そんな小春ちゃんが二次会の最中に私を自分の部屋に呼び入れた。私にとってはまさにそれが好都合。

茶の間の宴席にいても加齢臭漂うオッサン連中と話す話題なんて何もない。

せめて放ってくれたらいいものを、やたらとあれやこれやと構ってくる。

事あるたびにたいてい言われるセリフにもうんざり。

「麻美、お前はまだ嫁に行かんのか？」

「まあそのうちに^^;」

「誰もおらんかったら叔父さんが世話したろかあ？」

「いえ…私は大丈夫ですから^^;」

「行き遅れても知らんぞお」

「なんとかなると…^^;」と顔ではいつもの愛想笑い。

でも当然腹の中は煮えくりかえっている私。

（余計なお世話よクソジジイ！行き遅れても知らんだあ？知らんで結構！テメェらに知ってもらってたまるかってんだよ！このタコ！）
親戚だから両親もこの場にいるんだけど、言われるがままの娘を前に苦笑いしてるだけ。

結局そんな空気の重い中を逃れたわけだから、小春ちゃんには感謝。
感謝。

彼女の部屋のテーブルには、すでに飲み物とかお菓子とか、茶の間にあったものが揃えられている。目立たぬようにそつと持ち出して来たようだ。

缶チューハイをグラスに開け、あらためて乾杯する私たち。

「剛介のお嫁さん、可愛かったね。あんな優しいような子が小春ちゃんの義姉になるんだね」

私がそう言つと、意外にも小春ちゃんの表情が曇った。

「麻美姉ちゃん、アタシそのことでちよつと聞いてもらいたかったの」

「は？何か問題でもあるの？」

「うん。それがね……アタシちよつと心配なの」

「え？剛介のことが？」

「お兄ちゃんよりお嫁さんの小奈津ちゃん」

「ん？お嫁さん？どうして？」

「だって……だってお兄ちゃんは変態だから」

「（ノ——）ノコケッ！」

まさか小春ちゃんの口からそんな言葉が出るとは予想も出来ず、思わずズッコけた私。

（それにしても剛介のヤツ、相変わらず今も変態なのか……）

でも妹が心配するほどのことなのか疑問でもある。

「あのね、小春ちゃん。たとえそうであつたとしてもよ」

「たとえじゃなくて本当にお兄ちゃん変態なんだもん」

「じゃあそれでいいよ。剛介が今も変態男だとしてもよ、結局は結婚までたどり着いたわけだし、そのくらいのことは恋人時代にわかつてることじゃない？だからお嫁さんだってそれを承知でプロポーズを受けたと思うよ。きつとそうだよ」

「……だといいいんだけど。なんせお兄ちゃんはドスケベだから」

「男ってみんなそうだと思うよ。ムツツリかオープンかの違いだけでさ」

「でもお兄ちゃんは度が過ぎるでしょ。小学校のときからエッチで人に迷惑かけてたもん。アタシね、式の最中ずっと昔のことを思い出してたの」

「昔のこと？」

「うん。麻美姉ちゃんにも話したことあるよ。憶えてる？たしかアタシが小6で麻美姉ちゃんが高2のとき」

「ん〜ん：12年前かあ：かなり昔だよね^^;」

「あの時アタシこう言ったの。『結婚したらみんなエッチになっちゃうの？』って」

私はマジマジと小春ちゃんの顔を見た。

しゃべってる内容と顔の真剣さがとてもミスマッチ。たしか以前にも同じことを思ったことがある。うん、確かにある。

そう、彼女のこの表情で私はひらめきのように過去を思い出すことが出来た。

まさしくあの頃の小春ちゃんは今と全く同じ真剣な眼差しで私に訴えかけていたから。

1978年（昭和53年）

「結婚したらエッチしなくちゃいけないの？みんなエッチになっちゃうの？」

突然、小6の小春ちゃんから飛び上がるような質問が浴びせられた。

エッチに興味津々だった高2の私。でもさすがに小5の女の子に教えるべきことやそうでないことくらい判断はできる。

「ねえ小春ちゃん。どうしてそんなこと聞くの？誰にそんなこと聞いたの？」

「お兄ちゃん」

即答だった（ - ; （剛介のバカが…）

小春ちゃんも真剣そのものといった表情で話す。

「ずっと前だけとお兄ちゃんが言ってたの。小春は結婚して子供産みたいのかって」

「うんうん…それで？」

「アタシは当たり前じゃんて言ったらお兄ちゃんがね、『エッチなことしないで子供できないんだぞ』って」

（剛介め、まだ子供の小春ちゃんになんてことを…）

「アタシがそんなのウソだって言ったらお兄ちゃんが学校で習ったことを思い出せって」

「Σ―11（「 ; ）――1ええっ？今は小学校でそんなこと習うの？」

私が目を丸くして驚いてるのを小春ちゃんが不思議そうに見ている。

「麻美お姉ちゃんは習わなかったの？精子と卵子が結合して受精卵になるって」

「え？…あ、ああ…そうよね。ええ、それなら確かに習ったと思うけど（^□^；A）

私は自分の早とちりに顔を赤らめた。

だって、今の小学校ではSEXの仕方まで学ぶものと勘違いしちゃったから…

こんな風に思っちゃうなんて、私も相当エッチかもしれない。

「で、お兄ちゃんにそう説明したら『じゃあ精子と卵子を結合させるにはどうしたらいいと思う？』って聞くから、わかんないってアタシ答えたの」

「まだわかんなくていいの。小春ちゃんは」

「でもお兄ちゃんは教えてやるってしつこくて…」

「Σ―11（「 ; ）――1ええっ？それってまさか…？」

「なんか知らないけど急に『小春、ちょっと手を貸せ。俺のココ、触ってみろ』って」

私は開いた口がふさがらなくなっていた。

（し、信じられない……実の妹に何しようとしてんのよ剛介……）

（続く）

12話 ヤバい兄妹

小春ちゃんから聞いたことが、自分でも気づかぬうちに心に刻み込まれている。

当時高2の私にとって、エッチに対する好奇心を更にくすぐる刺激的なお話。

その証拠に、これまでの長い年月の中で、私の記憶から消え去ってしまったように思えたことが、29歳の今になっても細かい会話まで、より鮮明に蘇ってくる。

小5の小春ちゃんが私に明かした告白。

剛介が実の妹に指示してやらせたことは、兄妹の間柄において変態とも言つべき行為。とてもエッチなことなのに、真剣な眼差しで話す小春ちゃんの口調が印象的だった。

「お兄ちゃんがね、パンツの上から触れって言ってからそうしてあげたの」

「パ……！！！」

あぜんとした私。でもそれと同時になるべく平静を装う態度にも心掛けた。

「小春ちゃんあのね、そんな嫌なこととはしなくても良かったんだよ」と表向きでは落ち着いて言っている私も、実はその先を聞きたくて仕方ないのが本音。

「うん……でもアタシ……ちょっとだけなら触ってみてもいいかなって思ってた」

「（「」）ええっ？」

小春ちゃんが恥ずかしそうに顔を赤らめる。私の顔もなんだか熱くなってる気がする。

「だって、お兄ちゃんがいいって言ってるんだし、アタシもちよっ

と興味があつて」

「興味つて、子供がどうやったらできるかってことでしょ？」

「じゃなくて、男の人の……アレ？うわ、なんか恥ずかしい（／＼）」

恥ずかしいのは私も同じだった。

「いいのいいの。気にしないで。絶対誰にも言わないから」

「ほんとに言わないでね。麻美姉ちゃん」

「約束するよ。小春ちゃんと私だけの秘密。ここだけの話」

「うん……」

男の人の体に興味があるのは小春ちゃんだけじゃないもの。むしろ私の方が年頃。

それに友達はこの夏次々にロストバージンしてるのに私はまだ。

「じゃ続き教えて」

こんなこと平気で聞ける私もやっぱりエッチな女なんだと確認した瞬間でもあった。

「で、お兄ちゃんのアレをさすつてあげてたら、今度は指で押せとか言い出して……」

「押す？」

「うん。“ぷにっ”て何回も押せつて」

「ぷにっ……指でツンツンするってこと？」

「そうだよ」

「剛介はそんなこと妹に要求してたんだ……（＾□＾；A）」

「うん。そしたらお兄ちゃん『うっ……うっ……』とか言うからアタシびっくりして手を止めたらね、『やめんなコラ。もうちょっと上の方』だつて。痛いのかと思ったからやめたのにさ、もう訳わかんないから、めんどくさいなあって思ったり」

「アハハハ（＾□＾；A）そ、そうだよね」

もう私ヤバイ。冷静を装ってたけど、聞いてるだけでもうドキドキ。気分もエッチモードになりかけで、本当にヤバイ状態。

「それでお兄ちゃんが言うには『これが子供を作る第一歩だ』ってホントなの？麻美姉ちゃん。ホントにこんなことしなくちゃなんないの？」

ギクツ！Σ（・ω・；――

そんなこと私に急にふられたって困るだけ。

まだ小学生の小春ちゃんにエッチなことなんか教えるわけにはいかないもの。

この場をしのぐには、答える側から聞く側にならないと。

「一体、小春ちゃんはどこまでしてあげたの？途中でやめなかったの？」

「だってやめるなって怒るから……」

「じゃあどうやって終わったの？」

もうこのときの私は好奇心の塊になっていた。

小春ちゃんにエッチなことを教えてはマズいと正統な理由をつけておきながら、実際は彼女からエッチな体験を聞き出そうとしてる。

「お兄ちゃんがね、アレをさすりながら手を早く動かさせて」

「ちよつと待って（――；小春ちゃんはそのままでして平気だったの？」

「パンツの上からなら別に」

「あつそ……^^；」

「で、しばらくやってたらお兄ちゃんが急にのけぞってヒクヒクしちゃって……」

「イツちゃったんだ？」

「え？イツちゃったってなに？」

「うーΣ（・”・；）……いえ、何でも無い何でも無い。聞き流してヘタなこと言っちゃ大変。説明できないもの。」

「それで、お兄ちゃんが『今度はお前にやってやるよ』って言ったんだけど、アタシはやダって断ったの」

「ええっ？あのバカ、妹にそんなこと言ったの？」

「うん」

「そんなの断って当然だよ。気持ち悪い」

「だからアタシね、そのことお母さんに言いつけちゃったの」

「あらま^^;」

「お兄ちゃん、みつちり説教されてたよ(* m *)ププツ」

あわよくば近親相姦になりかねない事態だった。

こうして私が小春ちゃんから聞いた12年も前のリアル体験を思い起こしていると、

「お姉ちゃん、ねえ麻美お姉ちゃあん」

と、小春ちゃんが私の目の前に手をかざしていた。ハッ(。○。;)と我に返る私。

「麻美お姉ちゃんどうしたの？固まってたよ？」

「ああ…そうだった？ごめんね。今ちよつと12年前のこと思い返してたもんだから」

「あ、そっか。アタシがその話を間接的にお姉ちゃんにふったからだね」

「おかげで忘れてたことまで完全に思い出したよ」

「ね、わかるでしょ。お兄ちゃんの変態だって」

「うーん…ちよつと度が過ぎてるけど、そんな年頃の時きかもしれないし…」

「お姉ちゃん、別にお兄ちゃんをフォローしなくてもいいよ」

「そう？じゃ剛介は完全に変態だ！」

「きやははは(Ｔ　Ｔ)ノーミ　ばんばん！でしょでしょ？」

「でもね、きつと剛介のお嫁さんもそれは知ってると思うから、うまくやれると思うよ」

「知ってるかなあ？」

「小春ちゃんの取り越し苦労だよ。今夜は二人で楽しく飲もうよ」
「うん。そうだね。そうしょ」

こうして二次会をした内海家から帰宅したのがちょうど午前0時。やっと自分の部屋に落ち着いた私。

普通ならリラックスするのが当たり前なんだろうけど、今夜の私はなんか変。

変っていうか……つまり今の状態はエッチモード。

無意識に自分の手が自分の胸を触ってる。火照るカラダ。お酒のせいじゃない。

その理由は全て内海家で思い起こされた昔の記憶のせい。しかも刺激的だった思い出は、なにもそれだけじゃなかった。

実は剛介と小春ちゃんの一件から約一年後、思いもよらぬ展開になったことがある。

たぶん今の小春ちゃんでも知らないこと。

それはひょんなことから、私と剛介が二人きりになったときのことだ。

場所は私の部屋。従姉という関係の中で、私は剛介を――

私の記憶が再びあのときの過去へとさかのぼってゆく……

（続く）

13話 麻美と剛介

1979（昭和54）年8月

「うわ、やーらしい」

テレビの目の前にかじりつくような姿勢で観ていた剛介が驚いて飛び上がった。

まあ私がこつそり背後から声をかけたせいもあるけど。

剛介は驚きと同時に、かなり焦っていたことは確か。

「ヤラしいってなんだ！これは普通の歌番組だべや！」

「でも目を凝らして観てたでしょ」

「ちようど始まったところだからだ。麻美だつてヤンヤン歌うスタジオ観てるべ？」

私は剛介より年上だけど、ヤツは私を昔から呼び捨てにする。

「観てるよ。でも私はそんなにテレビにくつついて観ないもん」

「それは…チャンネル切り換えたところだったから…」

急に小声になった剛介。ウソがすぐわかる。

「正直に言えば？剛介はスクールメイツばつか観てたじゃん」

「ゲッ！Σ（・ω・；）——な、何言つてんだ！今オープニングだからそれしか映ってないべさ」

（ウフ（*’、’*）♪なんか可愛い。剛介がこんなに慌ててる。ちよつといじめちゃおっかな）

そんないたずら心が私の中に芽生えていた。

「でも剛介、パンチラ観ながら身を乗り出してたじゃん」

「うー！Σ（・”・；）——」

ウソのつけない素直な剛介の反応にほくそ笑む私。

そう。この番組は毎週、横に並んで踊っているスクールメイツのヒップをローアングルから舐めるようにカメラが動く。

「剛介ってやつぱりエッチなんだ？こんなの観て興奮してるんだも

んね」

「誰が興奮なんか…」

いくら言い訳しても無駄。私は見逃さなかった。剛介の下半身の中央が大きく盛り上がっていることに。

そもそもなぜ私の家に剛介と二人きりなのかというところ——

さっきまでこの家には帰省組も含めて三世帯ほどの親戚が所狭しといたのは確か。

でもうちら親族は、夕飯の前にはみんなで銭湯に行くというお盆恒例の行事がある。

まあ元を辿れば、10人を超える人数が順番に家庭用の小さなお風呂に入るのも効率が悪いという理由からなんだけど。

私は銭湯や温泉が嫌い。だからいつもみんなと行かない。

それはお風呂が嫌いなんじゃないじゃなくて、中1のとき虫垂炎の手術でお腹を切ったから。他人に自分の傷跡なんて絶対に見られたくないもの。

で、剛介はなぜ行かなかったかというと、単にこのテレビ番組を観るため。

しかもスクールメイツのパンチラを観るだけの不純な目的で。

「剛介、あれは下着じゃないんだよ。アンダースコートなんだよ」

「し、知ってるわい。そんなくらい」

「なら何でソコがそんなになってんの？（・・）むふふ」

私がちよいとその箇所を指さすと、剛介は焦りまくって両手で股間を押さえた。

「これはちよっと……」

もう言い訳にも何もならなかった。弱り果てた剛介をいたずらっ子な目で見ている私。

そしてまさにこの時だった。一年前、小春ちゃんから聞いた剛介とのきわどい話を思い出したのが。

妹だからって上から目線でヘンなことさせようとした剛介。

私に大胆な考えが浮かんだ。

（今度は私が利用してあげる（*’・’・*）ウフフフ）
でもその前にちよつと喉を潤そう。

「コーラあるよ。飲む？」

「あ？ああ…飲む」

バツ悪そうにしていた剛介が、私のツツコミから解放されて、少しホツとしたような表情が見てとれた。

（むふふ（・ー・））ちよつと一息入れるだけだからね）

これも私の計算のうち。剛介がシュンとなっちゃったら楽しくイジメられないし。

そしてとりあえず私はキッチンへ。剛介はテレビの前からソファに座り直し、体裁悪そうに番組を観ていた。

（続く）

14話　ちよつと好奇心

リビングのテレビから西条秀樹のヤングマンが聴こえている。

私がキッチンからお盆に乗せたグラスとコーラを持ってその場に戻ると、剛介がまた身を乗り出してテレビに食い入っていた。私はその光景を見てやれやれと呆れ顔になる。

（まったくもう、剛介ったら…）

私にはわかっていた。剛介は西条秀樹のファンでもないし、ヤングマンを聴いてるのでもない。理由は至ってシンプル。観たいのはスクールメイツのパンチラ。

つまりこの時代のアイドルの歌には大抵、大勢の彼女たちがミニスカをひるがえし、歌手のバッグで踊っている。

それにしても、剛介はただだけチラリズムが好きなんだろう。

そういえば、全国高校サッカーの決勝戦のハーフタイムに、ザ・バーズが歌って踊る“振り向くな君は美しい”を観ていたときも同じ光景を見たことがある。

あるいは高校野球の甲子園大会で、アルプススタンドのチアガールが画面に映ったときもそう。剛介が現場にいたら、きっとカメラ小僧になっでいて、パンチラ撮影で補導されるに違いない。

（男の子ってみんなこんなものかなあ…？）

そんなことを想像しながら私は剛介に声をかける。

「ねえ剛介聞いている？コーラは自分でついでね。私あんたの召使いじゃないんだから」

と、少し語気をわざと強めて注意をひく私。

「え？いや、そんな風になんか思ってた……」

そう言っで振り向いた剛介のセリフが止まり、彼の視線が一瞬にして私の素足というか、下半身に注がれた。

（（*・・・*）ウフフフ、やっぱり思った通りね）

そう、それは私がさっき、飲み物を取って来る前に、急いでミニ

スカに履き替えてきたから。不意にめくけると困るからタイトなやつを。

ちよつと恥ずかしかったけど、実はエッチな剛介がどんな反応するのか見てみたかったせいもある。

「どうしたの？ 剛介。何か言いかけたでしょ？」

「だからその…俺は麻美を別にそんな召使いとは思ってないし…」
わずかだけど、剛介が動揺してるのがわかる。

私は正座から両足を横に崩した状態で床に座った。はつきり言うてこれも挑発のうち。

こんなことができるのも、子供の頃から知ってる剛介だからこそなのかもしれない。

「ならよし！ まあ飲もうよ」

剛介が委縮しても困るので、ニツコリほほ笑んで飲み始めた私。

「うん…」

剛介からは私の下着が見えそで見えない角度。彼が身をかがめれば、たぶん見えちゃうかもしれない。でも不思議とヤツはしなかった。

その代わり、一気に飲めるはずのコーラをちびちび飲むたびに、視線が私のミニスカに集中してたのは確か。と同時に、剛介の股間が明らかに盛り上がってるのもよくわかる。

私の内に秘めたエッチな好奇心がじわじわと表舞台に現れようとしていた。

（きっと大丈夫だね… 剛介ならたぶん… いえ、絶対イヤとは言わないはず）

私が衝動的にやってみたくなった行動。それは……

—— 男の人のアレをさわってみたい！

まだバージンの私。今は彼氏もいない。いたとしたって、大好き

な人にそんなことできるはずもない。変態女だつて嫌われるのがオチ。

そう、剛介にだからできそうな気がするのだ。変態剛介だからこそ…

私に初めて彼氏と言える人ができたのは中3のとき。

そのときはエッチなんて全然頭になくて、少女漫画のシーンに出てくるような甘い甘いキスに憧れていただけの純粋な女の子。まあ自分で言うのもなんだけど。

でも実際に経験したファーストキスは、憧れとは程遠いものだった。

それは決して相手のせいじゃなく、全ては私のせい。

その日、風邪気味で体調が冴えなかった私に、当時の彼氏がついにキスを求めてきた瞬間だった。当然、拒む理由なんて更々ない私はすぐに要求を受け入れた。それが大きな間違いの素とも気付かずに。

そう、確かに私は彼氏とキスをした。緊張しながらも唇が重なり合ったまでは良かった。でもそのあとが非常にマズい。驚くほどマズかった。

重ねた唇が徐々に離れ、薄目を開けてお互いを見ると、なんと私の水っぱなが彼氏の鼻にくっ付いて糸を引いているではないか！

「うわああーっ！」

彼の悲鳴と共に、ひとつの恋が終わった瞬間でもあった。

この当時の私に言えることは経験不足。私には経験がもつと必要。本命とぶっつけ本番なんてうまくいくはずがない。私は心からそう思った。

ということとは、剛介と二人きりであるこの瞬間は絶好の機会。私にとって剛介はいじりキャラ。特に緊張する相手でもないし、申し分のないシチュエーションだった。

（これはいい予行練習になりそう。（　・　・　）むふふ♪）

イケナイことだとは頭の片隅にはちょっとだけあったけれど、思春期特有のエッチに対する好奇心には勝てず、私は大胆な行動に踏み切って行ったのだった。

そして29才になった現在、私にとってそれはとても刺激的ない思い出。

今でも剛介と私だけの秘密だけに……

（続く）

第2章 夢の初体験へ 1話 不運のきっかけ

自慢ではないが、俺は小学生の頃からスケベだった。

しかもむつつりではなく、オープンなスケベだ。

隠す必要もないと思ったのにはちゃんと理由があつて、女子から「エッチ！」と言われることが快感だったからだ。バカじゃないかと思われるかもしれないが本当の話。

確かに真面目なガリ勉女子は、俺を本気で毛嫌いしたが、ほとんどの女子は、

「もおーヤダあー（*v・v）内海君のエッチ！」とか、

「（ ）キャー」やめてー」とか、口では否定しても喜んでるように見えたのだ。

現に、俺がこれほどスカートめくりをしたあとでも、女子たちは気さくに俺と会話をする。これも俺がそれなりにルックスがイイせいもあるのだろう。

にも関わらず、人生とは皮肉というか、意地悪というか思うようにはいかないもの。

26歳になった今、確かにこうして小奈津とゴールインできた。結婚年齢としても決して遅い方ではない。

しかし…しかしここまでの工程が良くない。全く良くないのだ。

二次会にちよつと顔を出してホテルの部屋に戻ると、小奈津はすでに熟睡していた。

披露宴での疲れがどつと出てるのだろう。さすがにもう起こせない。

せっかくの初夜もこんな風に終わってしまうと思うと溜め息が出る。

俺は部屋の冷蔵庫から取り出したワインをグラスに注ぎ、窓の外

の夜景を見ながらずっとこれまでの過程を辿っていた。

なんでこうなったんだろう？俺はガキの頃からリーダーシップもとれるほどの行動派だった。思春期においても女子とは平気で会話できたし、エッチないたずらだってやめられなかった。誰よりも性に目覚めるのは早かったはずの俺が、誰よりも性体験に乏しい人間になってしまったのはなぜか？

考えられる原因が全くないわけではない。心当たりがあるといえはあるのだ。

それはまさに、こうなったきっかけだったのではと思える出来事かもしれない。

実は、こんな俺でも苦手意識のある女子がひとりだけいた。彼女は従姉で年齢が俺より二つ上の麻美という子だ。ルックスは俺の血筋だけに、美形と言えよう。

小さなガキの頃からよく一緒に遊んでたから、俺が呼び捨てにしても麻美は特に気にしていなかったが、いつも主導権を握っていたのは麻美で、俺はいいようにいじられた。

そんな中、思春期を迎えたこの俺には、とても刺激的な瞬間が待っていたのだ。

それは俺がまだ中3の夏。偶然にも麻美と部屋で二人きりになった日の出来事。

予想だにしないとはまさにこのことだった。

テレビを観ていた俺が、呼びかけられて不意に振り返ったその時、いきなり俺の目に入ったものは、ミニスカから覗いている麻美のパンチラ。というかパンモロ。

（うっ！こっ、これは…）

俺の下半身の一部がビクンと反応する。

（ヤベっ…こんなときに…てか、こんなときだからか^^;）

麻美はたたんだ足を横に崩し、少し開き気味に座ってるため、た

くし上げられて更に短くなったスカートの奥から、俗に言う“三角地帯”がはつきり見える。

(うう…白だ。俺が一番そられる白だ！)

もう完全に俺の股間はジーンズを大きく突き上げている。

麻美は気付いているだろうか？これがバレたら麻美にからかわれるどころか、もの笑いの種。親に告げ口されるかもしれない。一体どうすればいい？俺は今すぐ即決な判断をしなければならない。

この場面、両手を股間に充てて隠すのも非常に不自然。妙な慌て方もNG。いかに冷静を装いながら普通に振る舞うかがポイントだ。俺はコーラをグラスに注いで飲み始める。それも少しずつ注いでは何度も飲み、注目を俺の上半身に集めるのだ。その間にも麻美のパンツがずつと見え続けているため、俺の股間は膨らんだまま戻らない。

(ヤベえヤベえ…ラッキーだけどラッキーすぎてヤバイ)

このままいつまでも麻美のパンツを見ているわけにはいかない。見ていたいのには山々だが、俺のアレがいつ暴発するかわからない。残念極まりないことではあるけれど、俗に言う苦渋の決断というものに迫られることになる。

そう、俺は再びテレビへと目を移したのだ。

すると、番組的にはもうスクールメイツの出番が終わっていて、タレントたちが出演するミニコントのコーナーになっていた。中学生への刺激映像は特にない。

(しめた！これなら方向転換してテレビさえ観てりゃアソコも時期に落ち着く^^;)

俺は多少の安堵感を覚えながら、態勢を変えて座り直そうといていたその時だった。

「剛介、どうしてそこが大きくなってるの？(・ー・)むふふ」

(ぐはっ！やっぱバレてるぅ！Σ―11(´・`・)――)

もう言い訳は苦し紛れでしかない。俺は自分の下半身を見ながら、「別に大きくなんか……あれ？どうしたんだろ？お菓子でも入っちゃったかな？」

と見え透いたセリフをつぶやくしかなかった。当然そこには麻美のツツコミがあるわけで。

「なんでそんなところにお菓子が入るのよ^| ^・だいいち私、コーラしか持って来てないし」

「そうだったっけ？アハハハ、こりゃ失礼(^^ゞ)」

もうバレてはしょうがない。俺は片手で股間を覆い、苦笑いしながらコーラを一気に飲み干した。それをなぜか楽しむように見ている麻美。

「ねえ、そこってどうなってるの？」

テレビを観ようとする俺の邪魔をするかのように……いや絶対邪魔するつもりで話しかけてくる麻美。それに対応しようと振り向くと、またまた麻美のパンチラが俺の視界にモロに入ってくる。俺の下半身はおさまりようもなくなっていた。

「ねえ、その手どけたら？。カッコ悪いよ」

「い、いいじゃんか別に……」

「男子ってみんなそうなんですよ？気にしないよ私」

「ん？…ホントに？」

「なんなら触ってあげてもいいよ」

「えっ？ええっ？！？(。O。・)」

「触って欲しいんですよ？(*´・`・*)ウフフ」

「んなわけあるはず……ない……」

力のない俺の言葉に説得力などありやしない。

「そう。じゃあ私からのお願い。ちよつとだけでいいから触らせて」

「いやでもそれは……」

「Gパンの上からのタッチだけだよ」

「ん〜ん…」

「このことは誰にも内緒ってことにするから。私と剛介だけの秘密。ダメ？」

俺は迷ったあげく、結局サカリのついた自分の性欲と隠れた願望は抑えきれず、つい承知してしまったのだった。

（続く）

2話 意気地なしスケベ

「言つとくけど、アタシだから内緒にしてあげるんだからね」
そう言いながら俺の股間をさすっている麻美。

「うん…わかつてるって…あつ…」

さすりながらも時折指で強弱をつけ、グツと押し込んだり、指に挟んだりする麻美。

勝手にジッパーを下げられても抵抗することができない俺。

「すごいね。こんなに大きくなっちゃうんだ…」

パンツの生地がピンと張って、ハミ出んばかりに垂直にそそり立つ俺のアレ。

もう俺の全神経は下半身だけに一極集中していて超敏感。

極度の羞恥心から視線はテレビ画面に向いていても、画像なんて目に映っていない。

麻美の強弱指運動のたびに、稲妻のような刺激が俺の脳にまで直伝し、ビクンとアゴが上がる俺。そしてそれを面白がって見ている麻美の表情からも余計に快感を誘う。

そう、とんでもなく恥ずかしいのに、とんでもなく興奮する俺がそこにいたのだ。

「気持ちいいんでしょう？（・・）むふふ」

「き、聞くなよ、そんなこと…」

「素直になんなよ。ほら、こうしたらどう？」

指の動きを速めて、俺の表情をうす笑いしながら眺めている麻美。

「あう…うううっ」

たまらなくなつて俺の口から声が漏れ、息づかいも荒くなる。

「剛介って、声出す方なんだね」

（／／・／／）カァッ

羞恥度満点にも関わらず、突き抜けそうな快感に負け、麻美の攻撃をただひたすら受け続けるだけのM男な俺。ずっと見えている麻美のパンチラの影響もかなり大きい。

「おもしろい。ホントこのままどうなっちゃうの？」

麻美の愚問からわずか数秒、俺はフィニッシュを迎えようとしていた。もう我慢の限度はとくに超えている。

「もうダメだ……麻美やめろ！」

俺は麻美の手を払いのけた。決して本心ではなかったが、麻美にフィニッシュを見られる辱めだけは受けたくなかったからだ。

「なんで？もうスッキリしたの？」

「いや、違うけど……」

「まだこんなに大きいのに」

「いいんだもう……ヤバいし」

「……………」

つまらなそうな表情になった麻美。でも仕方ない。これだけは諦めてもらうしか……

と、思った俺が甘かった。

「ダメ！中途半端は良くないよ」

そう言った麻美がいきなり俺のアレを握りしめ、再び激しく動き始めたのだ。

「んあっ！！ちょっとよせて……うっうっ！！」

一旦解放された快感が、再び急激な刺激を受け、一気に昇りつめようとしていた。

もう麻美の手を跳ねのける精神力もない。

「うぐっ！もう……ダメだ。イクっ！」

俺の漏らした声にニヤツと笑った麻美。こいつは絶対S女だ。

「ウッ！！」

俺は後ろにのけ反って、フィニッシュと同時に体の動きが止まった。

「へ（　　）へ（　　）きゃーっ」

麻美はとつさに俺から離れ、悲鳴をあげながらも視線は俺の下半身に注いでいた。

パンツの中でフィニッシュしたため、生地全面に染みが広がっている。

それよりも何よりも、その勢いで俺のアレがパンツからハミ出てしまっていたことが麻美の悲鳴の原因でもあった。

とつさにパンツの中におさめる俺。染みて濡れてるパンツは非常に気持ち悪いが、どうこう言ってる場合じゃない。

そんな中、俺が更なるショックを受けた麻美の言葉。

「む、むけてるっ！キャハハ（　　）」

「えっ？」

当時、体の知識が何もかったバカな俺は、この言葉を真逆に受け取ってまう。

つまり、俺の大事なモノの先っちょがむけていることが異常なことでだと思ってしまったのだ。

以来、俺は事あるたびにアレの皮を引っ張り伸ばすクセがつき、それは結婚するまで続くトラウマになってしまったのである。

更に言えば、これをきっかけに俺の童貞喪失までの道のりが、大きく左右されることになったのも事実なのだ。

（続く）

3話 特別な彼女

「いいか。男つてのはな、さつさと童貞を捨てなきゃみつともないんだぞ！」

昔、従兄のアニキに言われた言葉がいつも俺の胸の中にある。

しかし、ガキの頃から信用しているアニキを否定するつもりは毛頭ないが、疑問や矛盾があることも確かだった。

中学生になって、にわか知った性交渉の具体的な知識。

それも下校途中の橋の下、秘密の隠れ家的なわずかなスペース、誰かが保管していたエロ本や官能創小説のストックを夢中で読みあさって身につけた知識。

歴史の年号は憶えられないのに、エロ学だけは文字も画像も全て記憶の隅々にまで刻み込まれ、自分は暗記の天才少年じゃないかと勘違いするほどだった。

で結局、そこから生まれた疑問や矛盾。

果たして、男の童貞喪失に協力してくれる女子がいるだろうかということだ。

男はすぐにちよつとしたことでエロモードになるが、女子の場合が全く読めない。

いつもスカートめくりを日課にしてる俺に「エッチー！」だの「変態！」だのと叫んでいる女子が、はいどうぞと自らパンツを見せてくれるはずもないし、だいいち童貞を捨てるためには俺自身、人前でパンツを下ろさなければならんってことだ。

エロと純情の交差したガキの俺にとっては今全く以って信じ難いこと。自分が好きになった子にそんなことできるはずもないし、彼女が俺のアレを見て「ステキなおちんちんね」なんて言うはずもない。童貞を捨てるというのは本当にそういうことなのか？

誰もがみんなこんなこと経験してるんだろっか？

アニキは本当にこの試練を乗り越えたんだろっか？

。たとえお互いが好きな者同士であっても、進んでエッチを要求する女子がいるとも思えない。それとも女子は口には出さずとも、エッチされるのを期待して待っているのか？いや、絶対そうじゃない。つまりどうにもこうにも、中学生の俺には童貞喪失というシチュエーションは、あらゆる想像を掻き立てても、はるかにそれを超える一大イベントだったのだ。

そんな中、その解決を見出す糸口になる出来事が起きた。例の麻美との一件だ。

俺にとつてはもちろん衝撃的というか、かなり刺激的な出来事だった上、新たに学習した事実と発見は俺の人生においてかなり大きい。

そう、女子もそれなりにエッチなのだ。男をただ獣のような目で眺め、エッチに嫌悪感を示す女子ばかりではないことがわかれると、少しながら俺に安堵感をもたらした。

平静になれば、考え方も徐々に冷静になってくるもの。

そもそも女子たちだって、子供を産むにはエッチしないとできないことくらいわかってるはず。なのにエッチに嫌悪感を持つこと自体おかしい話であり、そんな女子はまだ未熟なひよっこなのだ。俺が臆することなど毛頭ない。

だが、それがわかったところでまた壁にぶち当たってしまう。

俺がひそかに恋心を抱いていたクラスメイトの菅野^{すがの}まみか。

成績はいつもトップクラスで部活はテニス。ペチャクチャやかましいくらいに大笑いしながらしゃべりまくるどう見てもアホな女子連中とは全くの別格。

笑い方だって必ず口に手を当てて微笑み、大声は出さない。

高飛車な態度もとらないし、正直で純情そうな目が誰よりも澄ん

でいる。

いかにも育ちが良いというのがわかるくらい気品があり、まさに理想中の理想とも言うべき完璧な女子なのだ。

もちろん、こんな子にはスカートめくりもしないし、胸を揉んだりもしないし、テニスしてるときのパンチラも見に行かない。

できるはずがない。したくてもできない。好きを通り越して憧れなのだ。

俺は当時マジでこう思ったものだ。

菅野は納豆とか牛丼を食う女じゃないし、屁もこかなければゲツブもしない。

彼女はキラキラ輝く草原を走る少女。海から潮風を運んで来る少女。

まして、男とへっぺ（SEX）したいなんて思うはずもないし、ひとりエッチなんて絶対してるはずがない！

だがその半面、ひょっとしたら菅野だってひとりでしてるんじゃないかと逆に想像してみると、俺自身がじわじわとエロモードに突入し、ついには自分で処理してしまうハメに。

まあ、俺のことはどうでもいいが、そんな菅野が将来、誰かとへっぺすることに抵抗がないのだろうかといらぬ心配をしてる始末。

（菅野が麻美くらいエッチだったら最高なのにな…）

都合のいい解釈をしながら妄想を重ねる俺。でもそれはあくまでも妄想。

とにもかくにも、度胸のすわらない俺にとって、菅野まみかは高根の花。

結局、童貞を捨てるどころか、そのきっかけもつかめないまま、俺の中学生生活はこうして幕を閉じたのである。

（続く）

4話 野獣な16歳

1980（昭和55）年

さほど受験勉強らしきことをしなかった俺が入学した高校は、バカでも入れる公立校。

人間十人十色と言うけれど、似たようなレベルの野郎どもが集まると、考えることも似たり寄ったりで、常に話題はエロ話と女のことばかり。

「内海、お前はどんな女がタイプなんだよ？」

そう聞かれて思い出すのは、やはり中学時代、密かに好きだった菅野まみかの印象だ。

「キラキラ輝く草原を軽やかに走る少女かな」

こんなこと言うとすかさず茶々が入る。

「野人かよ」

「ちやうわ！」

しょうもないツツコミも一応は否定して、別なニュアンスに変えてみる。

「海から潮風の香りを運んで来るような少女というか……」
と言ったところで無駄だった。

「舐めたらしょっぱえ女が好きなのか？」とか、

「磯くせえ女が好きなのか？」とか言われる始末。

まあ、頭がこんなパーみたいなのが集まった高校だからしょうがない。

反省点としては、松田聖子とか、河合奈保子みたいな今売り出し中のアイドルの名前でも言っておいた方が良かったかもしれないってことだ。

16歳の男子は身も心も野獣化する。かろうじて残っている理性は風前のともしび。

とにかく童貞を早く捨てたい野郎どもが常に色めき立つ毎日。好きな子とロマンティックな恋がしたいとか、ムーディなエッチがしたいとか、そんなきれいごとじゃない。とりあえずやりたい！できれば可愛い子にやらせてもらいたい！恋人として付き合っかうかはその後を考えればいい。そう本気で思っている盛りの時期。

「D組の山根かすみっていいと思わん？」

「おお！お前もそう思ってたか。俺もよ俺も」

「だべだべ。めんこい（可愛い）声してるしょ」

「ありゃきつとアノ声も相当可愛いな。たまらんわ」

「一＊、m」プ。お前またすぐそんなスケベなこと考えやがる」

「うつせえ！どうせお前だって同じこと考えてたんだべや」

「まあな。でも山根って、もう男経験あるんだべか？」

「いやあゝまだじゃねえの？」

「あと俺はB組の園村渚子そのむらなきりがいいな」

「あ、知ってる！バトン部だろ？いいよな、あの子」

「しかもあいつ、結構エロいかも」

「どしてだ？」

「あいつ、男の視線に気づいてるクセによ、意識的にミニスカハイキックすんだぜ」

「そりやただ部活の練習してただけだろが。それをエロい視線で見てたのがお前だ」

「いやいやいや、絶対あいつは男を目で誘ってるって」

「目かあ…そういえば…」

「制服でも男の前でわざとクルツと廻ってよ、ふざけたふりしてスカートひるがえしてんだぞ」

「あー、それ見たことある！」

「だべ。お前もしっかり見てんじゃん」

「いや、パンツまでは見れなかった」

「ああいう女つてきつとエッチ大好きっ子だぜ」

「じゃあ渚子と付き合ったら、すぐへっぺ（SEX）できるってことか？」

「可能性は高いかも（――）ニヤリ」

俺の悪友でもある水野や景山らの日常グループ会話。

こいつらとは、いつも同学年女子をターゲットに、この子とエッチしたらどうなるだろうとか、家に一人でいるときはきつとこんなエッチしてるとか、あれやこれやと勝手な妄想をしては話を盛り上げていた。

そのクセ、いまいち性の知識に乏しい面も当然あるわけで、初めて“フェラ”という言葉とその意味を知ると、

「うわあゝ！俺無理。女の子にしゃぶられるってか？絶対無理！」

「てか、そんなことできる女の子なんていないべさ」

「官能小説じゃあ結構当たり前に書いてたりするぞ」

「あれ苦手だな。漢字難しいから面倒くせえ」

「でも読むんだべ？」

「ま、一応読めるところはな。小説の作られた世界でもオカズにはなる」

「あのな、小説だからってウソばっかじゃねえって。お前らの母親と父親だって、小説みてえなヤらしいことしてお前らが産まれたんだべや」

「それ言うなや。想像したくねえ（――；）」

「お前の母親も父親にフェラくらいしてんだぞ。夜はアンアン言ってんだぞ」

「お前んちだって同じだべ！わかったからもっ言っな！なんかへこむ」

言ってることは多少過激ではあるけれど、実際にはまだまだデカ

い口だけ叩くケツの青い未熟なクソガキでしかなかった。

結局その結果、そこで抱いた妄想を家に持ち帰り、かずみや渚子の卑猥な姿を思い浮かべたり、それに菅野まみかも加え、彼女が俺にフェラという行為をしてくれる画を新たに想像しながら、自分の部屋でひとりエッチに没頭するのが関の山だったのである。

そんな中、俺にとって最大のチャンスが訪れた。

あの、エロくてフェロモンムンムの園村渚子が、突然俺にコンタクトしてきたのだ。

物おじしない積極的な渚子は、友達を介さず自ら俺を校舎裏にまで呼び出し、堂々と交際を申し込んで来たのだ。俗に言う告白ってやつだ。もちろん俺に断る理由などありやしない。まさにこれは童貞から卒業できる絶好のタイミング。

理性より本能が勝っていたこの当時の俺は、付き合う嬉しさよりも、女とやれる喜びで有頂天になっていた。

その場は日曜デートの約束を交わしすぐに別れたが、その晩自分の部屋で渚子をイメージしながらやったひとりエッチは、一体何回に及んだか憶えていない。

（続く）

5話 このままじゃできない

そもそもこいつのこんな言葉を真に受けたのが間違いだった。

「内海、いきなりへっぺしようとするなよ」

同級生の水野昭信から受けた忠告。

そんなことくらいわかってる。ガキのスカートめくりじゃあるまいし、会ってすぐに押し倒すわけにはいかない。だいいち俺にとっても初体験になることだ。多少の緊張はつきもの。まずはじっくり話をしながら徐々にそういうムードに持って行くことが大事。

俺がその旨を水野に言つと、やつは俺の師匠にでもなったかのように、腕を組んで深くうなづいた。

「ならよし。とにかく焦っちゃダメだ。最低1カ月は何もすんな」

俺は水野の意見に耳を疑った。

「へ？なに？1カ月もか？」

「当たり前だべ！お前、どのくらいでやろうと思ってたんだ？」

「どのくらいって……ムードが出来次第ってか……」

「アホ！すぐじゃねえか。もつと辛抱せえや」

「すぐってことになるのか？ちゃんとムード作っても」

「お前さ、言うのとやるのは全然違うぞ。絶対失敗するって」

「ん〜ん……でも俺、そんなに我慢できっかなあ……2回目のデートじゃマズいべか？」

「早すぎる！もっと日にちが経ってからだ」

「でもよ、あつちから俺に告白して来たんだぞ。それなのに抵抗されるべか？すんなりやれそうなのがすっけどなあ」

「それが甘いつてんだよ」

「甘いべか？」

「そうよ。ただヤルことしか考えてねえって思われたらどうするん

だ？」

そう言われて俺はギクツとした。

（そうだ。その通りだ。俺は女とヤルことしか考えてなかった）

当然、そのことは水野にもわかっていたわけで。

「実際お前はそれしか考えてないのはわかってるけどよ。渚子に見透かされちゃマズいんじゃないのか？」

「そ、そうだな……確かに」

俺は静かにうなづいた。

「それによ、ヤルときは勢いでやっちゃダメだ。ちゃんと段取りを頭の中でシュミレーションしないと。だいいち内海、お前ちゃんと女を抱けんのか？いざ本番になったら絶対ビビっちまうぞ。正直、俺ならビビるわ」

水野も童貞だけに、情況予想を冷静に力説する姿勢や気持ちは俺にもわかる。

「まあ……な。きっと俺もビビるかもしれん」

「だべ。お前にできっか？渚子のパンツ脱がせてやったりすんだぞ」

「うゝん……できんこともないと思うけど」

「それにお前も自分のパンツ脱いで渚子にアレ見せるんだぞ。舐めさせるんだぞ。そんなことすんなりできんのか？」

「そうだった……そうだよな。それがあつたよな」

水野のもつともな意見に俺の気持ちはみるみるうちに意気消沈していった。

特にこのとき俺は、麻美との一件によって、自分の大事な部分の皮が剥けていることが包茎よりおかしいという真逆な認識をしていたため、深刻に悩み初めてしまったのだ。

毎晩、風呂のときに皮を引っ張って伸ばしてみているものの、効果は得られない。

（恥ずかしくてこんなの女に見せれん。ヤバい。どうするべ……）

そんないきさつもあって、俺と渚子のデートはいくら回数を重ねても、帰り間際になるとどこかぎこちなかった。

確かにウキウキ気分を外で遊んだり食べてるときは楽しい。でもそれが済んだとき、頭の中に渦巻いている切なる願望は、渚子とエッチすること一点のみ。

なのに、それを邪魔するのは親友水野の的を得た忠告と、自分の恥ずかしいアソコ。

（このままじゃダメだ。もっと技術を学んでからじゃないと渚子にバカにされる）

男たるものの女を常にリードするもの。しかも満足させてあげなければならぬ。

高校生ながらにそう心に堅く誓ってはいるものの、どうすれば学べるのかもわからない。

従兄のアニキは横浜に行ってしまったし、連絡もとりにくい。

麻美に相談することも考えたが、どうせまた弄られるだけだし、女をリードすることなんて学べない。その反面、あときは気持ち良くてたまらんかったから、麻美だけにならまた弄られてもいいかなとも思ったりする（^ー^；）

いろんな複雑な思いが俺の中で絡み合いながら、無意味な日々が刻々と過ぎて行くそんなある日のことだった。

下校時、いつもは渚子と途中まで帰るけれど、この日彼女は女友達の誕生日に呼ばれて別行動。まっすぐ帰るのもつまらないから、少し遠回りしようと俺はいつものコースを変えて歩いていた。

とある公園のそばに差し掛かったとき、正面から見慣れた子が犬を連れて近づいて来る。

「あっ！」

先に声を発したのは向こうの方だった。

「やっぱり内海くんだ」

相手の女子は、体調不良で今日の午前中で早退したはずの藤尾真紀。

「あれ？藤尾お前……具合悪かったんじゃないの？」

一瞬の間はあったが、一応返事は返って来た。

「ああ……あれはすぐ治ったの」

「ふうん。そっか」

「内海くんの家こっちの方だったっけ？」

「いや、ちよつと遠回りしてみようかと」

「なんで？」

「特に理由はないけど」

「あゝあ、やっぱりうまくいかないもんね。誰にも見られないつもりでゴンスケと散歩に来たのに」

ゴンスケとはもちろん犬のことだろう。俺には野良犬にしか見えないが。

「そういえば藤尾は最近彼氏できたんじゃないか？」

「最近じゃないよ。もう3カ月くらい経つよ」

「そんなに経ってたっけ？」

「内海くんだって渚子とだいぶ経つんじゃない？」

「それほどでもないけどな」

なぜか藤尾真紀は俺の顔を見てニヤニヤしている。

「ねえ、聞いていい？」

「なにを？」

「あのさ、もう渚子とエッチしてるんでしょ？」

「んなにっ？」

いきなりのストレートな質問に俺は度胆を抜かれた。

どっちかと言えば童顔でおとなしい藤尾の口から出る言葉とは思えなかったからだ。

「だから、渚子と会ったびエッチ楽しんでるんでしょ？」

（あれ？さっきより質問が過激になってねえか？）（……）

もし俺がすでに渚子とエッチ三昧だったなら、

「おう、バリバリ楽しんでるぜ。もう気持ち良くて気持ち良くてたまんねえよ」

と、声を大にしても平気で言えるのに、無様としか言いようない現状にうまくはぐらかすので精いっぱい。

「人に聞く前にお前から言えよ。彼氏といつもしてんだべ？」

普段ならなかなか女子には聞けない質問だが、藤尾から仕掛けてきたことだ。こちらとしても非常に聞きやすい。一体どんな返事が来るのか、急に興味が沸いてきた。

「してるよ。してるけど……彼があまり喜んでくれないんだ」

「はあ？ どういうことだい？」

何やら事情がありそうだ。

藤尾はちよつと考えてから、急に思い立ったように言った。

「ねえ、内海くん。ちよつと相談にのって欲しいんだけどいいかな？」

別に暇だし断る理由も何もない。

「いいけど、俺で解決することか？」

「わかんない。じゃあとりあえず一緒に私の家に来て」

「ええっ？ いいのか？」

「うん。今なら家に誰もいないし」

（だったら余計にマズいんじゃないかねえの）（……）

と思いつつも、俺の足は素直に藤尾真紀の跡を追っていた。

（続く）

6話 奇抜な相談ごと

ここは藤尾真紀の部屋。ワリと簡素で、普通ありそうな可愛い動物のぬいぐるみやクツションなんかは見当たらないし、麻美の部屋みたいなピンクのカーテンやカーペットがあるわけでもない。女子高生にしては地味な部屋の部類になるのかもしれない。

藤尾は自分の机の回転イスに座り、突っ立ってる俺の方へ向き直る。

「あ、内海くんは私のベッドの上にでも座って」

「え？（^ー^；）」

「床でもいいけど落ち着かないでしょ。私の部屋、テーブルも何もないから」

（ベッドの方が落ち着かないような気もするが……（- -；）

そう思いつつも、徐々に高まる興奮をおぼえながらベッドに座る俺。

しかしながら、それを悟られぬためには、何か適当な会話を仕掛ける必要があった。

「へえ、藤尾って田原俊彦が好きなんだ」

それはたまたま彼女の部屋に貼ってあった巨大なポスターからして一目瞭然。

「うん。私はトシちゃん派。でも渚子は確かマッチ派のはずだよ」

「渚子が？全然知らなかった（^ー^；）」

「渚子の家にはもう何回も行ってるんでしょ？」

「いや、まだ行ってない」

「ウソ？ほんとに？じゃあ渚子が内海くんの家に行くの？」

「……いや、来てない」

「えっ？じゃあどこでエッチしてるの？」

ギクッ！Σ（・ω・；）

（そうきたか……）

「どこでって……まあいろいろ」

「ラブホ？」

「いや、そんなとこ行けるだけの小遣いもらってないし……」

「そうだと言っておけば良いものを、なぜかバカ正直に答えてしま
う俺。」

それをどう受け取ったのか、含み笑いをする藤尾真紀。

「ねえ内海くん、ひよつとしてまだ渚子とエッチしてないとか？」

（やべ。やっぱわかつちまうんかな……）

俺は苦し紛れの返事をするが、明らかに白々しいと自分でもわか
る。

「ご、ご想像にお任せします……ハハハ>（；　^　—　^）」

真紀がいたずらっ子のような目で俺を見つめて核心をつく。

「そっかあ、やっぱりまだ渚子とエッチしてないんだあ」

「そう言われても素直に認めてしまふのはちょっと屈辱的なもの
がある。」

「誰もそんなこと言ってないべや」

「でもそうなんでしょ？」

「な、なんでそう思うんだよ？」

「返事が曖昧な場合はエッチしてないってこと。してる人はきちん
と言つもの」

（もうダメだ。こいつわかってるし）　・　・　・

俺の冴えない表情や焦りに気付いたのだろうか？なぜか真紀が俺
をフォローするようなことを言い出す。

「あ、ごめん内海くん。私が言ったこと気にしないで。内海くんが
まだエッチしてないってことは、渚子を大事にしてるってことだよ
ね」

「おい、そんなに何回もエッチしてないって言うなよ」

「ごめん^^；　でも大事にしてるでしょ？」

「そりやまあ……な（^^）」

「でも良かった。今日、偶然会ったのが内海くん。かえって相談しやすいもん」

「ん？そりやどういう意味？」

そう言えばそうだった。ここに連れて来られたのは、真紀の相談にのってやるためだった。女の子の部屋に入るのは麻美の部屋以外は初めてだから、高まる興奮が先に立ち、用件など俺の頭からすっ飛んでいたのだ。

少し落ち着きを取り戻した俺は、藤尾と交わした道端での会話を思い出した。

「相談って、さっき外で言いかけたことかい？」

「私、なんて言っただけ？」

（おいおい、自分で言っただこと忘れんなよ）

とは思ったものの、ここは口を慎んだ。

「ん、たしか彼があまり喜んでくれないとか」

「そうそう、それぞれ」

「どういうことさ？何が喜んでくれないのさ？」

「なんかね、彼が言うには私がヘタクソなんだって」

「だから何が？」

「もうっ！内海くん鈍すぎ！エッチに決まってるでしょ」

（つくづく思うが、藤尾ってあからさまにこんなことが言える子だとは意外だった）

「エッチ？お前、彼氏にエッチがヘタクソだって言われたの？」

「だからそう言ってるでしょ！」

「でもそれっておかしくねーか？普通は男がリードするもんじゃねえの？」

この発言で俺の知識や経験のなさが証明される。

「内海くん、それは間違い。女だって、男に尽くさないといけないんだよ」

「尽くすってなんか古くさい言い方だな。メシ作ったり部屋の掃除

してやったりってことじゃないのか？」

「だからエッチのことって言うてるでしょ！内海くんの言うてる事の方が古くさいよ」

「あっそ。それはいいません……（　　）」

こんな会話のリレーをしながらも、俺のハートが徐々に高鳴ってゆく。エッチについての相談事だということが確実にになると尚更のことだ。

「でも藤尾、具体的に言ってもらわんとわからんよ。どう尽くすんだい？」

こう聞きながら、至って顔だけは冷静を装う俺。本当は藤尾の口から過激な言葉が聞けるのを期待してフツた質問なのだ。

「だから、彼のアレをチュウチュウしたりとか、手でしてあげたりとか……」

（うつ！Σ（・　・　））マズイ！一気に興奮してきちゃった！

それでも俺は理性を保ちながらゆっくりと話す。藤尾に気付かれずにさりげなく下半身の中央部を押さえながら。

「どういうことさ？そこまでしてるのに何で喜んでくれないのさ？」

「それはやっぱり……私の技術がヘタだからだと思うの。むせて彼のアレを嚙んじやったりもするし」

（ぐはっ！生々しい……（　　））

「藤尾の彼氏ってうちの高校？」

「違うよ。10歳年上。26歳なんだ」

「ええっ？そんな年上？」

「うん。彼は経験豊富みたいで、私の尽くし方じゃダメだって言うの」

「なるほどね。そういうことだったのか（　　）」

「やっとわかった？」

「まあね。26歳なら経験は豊富だろうし」

「でしょ。だから内海くんをお願いしたいことがあるんだ」
「?????」

事情はわかったが、そんな理由で俺をお願いしたいことがあるなんて全く意味不明。

「あのさ、それって俺に相談して解決することだべか？」
そのとき、なぜか藤尾の目がキラツと輝いたように見えた。

「実はね、最初は正直どうかと思ったんだけど、内海くんとならなんとか解決できそうな気がしてきたよ」

「あのー、全然わけわかんないんですけど俺（＾|＾；）」

藤尾真紀が自分の椅子から立ち上がって俺の横に座った。
なんとなくいやな予感が……じゃなくて、嬉しい予感の兆しがあった。

お互い横に並んで視線を合わさないまま、藤尾が少し恥ずかしそうに言った。

「内海くん、私と練習しない？……エッチの」

（きたあああああああ！）

「私、彼をもつと満足させてあげたいんだ。経験不足を補いたいのにやあ、でも……」

本音から言えば即答したいのは山々だが、ここはもう少し耐え忍んだ。

「ダメ？お互い彼氏彼女がいるんだし、逆に内海くんとなら割り切つてできるかなって思ったの。それに経験不足もお互い様でしょ？ピツタリだと思わない？」

「確かにそうかもしれないけど……」

「あ、もちろんC（SEX）はしないよ。Bまでね」

ここで藤尾は俺に懇願するような視線を向けた。

まるで夢のような現実な話。おいしすぎる話。かつがれてるような話だ。

俺に断る理由などない。そう、割り切りなんだし、お互い技術の成長に繋がる。どっちにしてもプラスな話なんだ。それにCはしなくとも、Bはたっぷり勉強できる。

「仕方ないな。藤尾がどうしてもって言うんなら協力してやるよ」

わずかな男のプライドと意地で返答した俺。

「ほんとに？良かった。私、結構勇気振りしぼって言ったんだからね」

「へえ、そうは見えなかったぞ」

「もうドッキドキだったんだから！」

そう言うなり、藤尾が俺に覆いかぶさり、二人はベッドに重なった。

「あくまでこれは私たちだけの秘密だよ。絶対にね」

「あ、ああ。もちろん」

重なった状態のまま、俺の耳元でそう囁く藤尾真紀であった。

（続く）

7話 スキンシップ

密着した体から少しだけ状態を起こした藤尾。仰向けになって俺の顔の正面に彼女の顔が現れた。その距離わずか20?ほど。

パッチリした目で俺を見つめている表情はかすかに微笑んでいて、まさにやさしい悪魔というフレーズがピッタリくる。学校で見るイメージとは真逆といっていいほどだ。

(これが魔性の女というものなんだろうか?)

とにかくこのままだと俺が藤尾に身を任せる形になれば男としては失格だ。

俺は藤尾の背中に腕をまわし、キスの態勢を作ろうと軽く引き寄せた。

すると――

「それはダメ!」

藤尾が自分の手のひらで俺の口をふさぐ。

俺はすでに目を閉じて唇を尖らせかけていたから、とんだ赤っ恥になった。

「え?なに?どういうこと?」

その気になりかけている俺が一瞬の拍子抜け。

「私、Aは好きな人とし^{キス}かできないの」

おかしなことを言い出した藤尾真紀。これからそれ以上のことをするはずなのに。

「はあ?キスしなきゃ何も始まらないんじゃない? (^ - ^)」

「そんなことないよ。AはしなくてもBならできるもん」

「ふうん……いまいちピンとこねえけど、そういうもんかねえ?」

「そういうもんだよ。私はね」

ちよつと考えてから言葉を返す俺。

「まあ、なんとなくわかるような気もするけどな」

この俺の同調した言葉に少し気を良くしたのか、藤尾の表情が更にパツと明るくなったように気がした。

「でしょでしょ？さすがエッチな内海くん。私の気持ちわかるよね？」

「それほめてんの？」

「そうだよ。私の友達はわかってくれないんだ」

「だろうねーハハ」

「安心した。それじゃあそろそろ……（*ハハ*）えへへ」

藤尾が茶目つ気のある表情で、急に囁き声になった。

「先に私から練習していい？」

「いいけど……俺は一体どうすればいい？」

「そのままでもいいよ」

そういうや否や、藤尾は俺の股間にそつと手を伸ばし、学生ズボンの上からゆっくり円を描くように大事な部分をまさぐり始めた。

彼女の顔はまだ俺の真上にあつて、股間を刺激しながら俺の表情をうかがっている。しかも小悪魔的な微笑で。これにはたまらず俺の下半身も一気に立ち上がる。

当然のことながら藤尾もそれに気がつき、

「ズボンの中から出してあげないとココが可哀そう」

そう言つてファスナーに手をかける。

「あ、ちよつと待てよ。それは俺が自分で……」

と俺が言いかけているうちに、藤尾はすでにファスナーを下ろしていた。

「内海くん、そんなに緊張しなくていいよ」

あつてあかんとそう言い放つた藤尾の行動は素早かった。

顔の位置を俺の下半身まで下げ、すぐにパンツの上から俺の大事なものに指をツーツとすべらす。

「あうっ……」

思わず漏れてしまった声。

普段それほど慣れ親しんだ間柄でもない女子にこんなことをされ

るのは極度に恥ずかしい。それに今日はいてるパンツが汚くないか若干気になるところでもある。

とりあえずパンツの件に関しては藤尾が何も言わないからクリアしたようだ。

藤尾は俺のパンツの上から、自分の手のひらや指を使い分け、アレを撫でたり小刻みにつまんだり、あるいは指先や爪でコチヨコチヨくすぐったりと絶え間なく刺激し続けた。

「んっ……ああ……うっ」

俺が溜め息混じりな声を漏らすと、

「内海くんって感じやすいんだね。私の彼氏は全然声出さないから、どうしたらいいかわからなくなっちゃうんだ」

と藤尾が手の動きを緩めずに諸事情を語る。

「そ、そうなんだ……うっ……」

「うん。だから今日はなんだか自身が持てそう。内海くん、我慢しないでもっと自由に声だしていいいよ。感じるままにね」

これを聞いて更に俺が顔から火が出るほどの羞恥心を味わったのは言うまでもない。

普通なら男が女に言うべきセリフなのだ。男のお株をとられてしまったようなもんだ。

A
それにしても——やっぱり俺も感じすぎるのかもしれない（＾□＾；

「藤尾、お前こんなこと……んあっ……いつも彼氏に……うっ………してるのか？」

不覚ではあるが、感じるままに問いただす俺。

「そうだよ。でもまだまだ慣れなくて」

（そうは思えないが……（——；）

「ねえ内海くん。私のこと、下の名前で呼んでいいよ。苗字だと堅

苦しいし、ムードがでないもん。真紀でいいから」

「あ、ああ……真紀な。わかった」

俺が昇天に向かって一直線に進んでいたそのときだった。

「ねえ内海くん。下着下ろしていい？」

「Σ―11（ ; ）――えっ？」

「だってもう垂直だよ。下着もはちきれそう」

「いやいやいやそれはちょっと……」

「？」

慌てて俺は自分の両手で真紀の手を差し止めた。

「見られるの恥ずかしいの？私は平気だよ。いつも彼氏の見てるもん」

「いや、俺のは他の人のとはちょっと違って……（ ; ）」
「違う？」

当時から俺は包茎ではなかった。だが未熟な性知識と勘違いから、皮が剥けていることの方が異常だと信じていたため、人に見せられる代物ではないと思い込んでいた俺は、かたくなに拒否するしかなかった。

「パンツの上からなら何されても構わないからさ、見るのだけはちよつと勘弁してくれ。お願いだから」

必死な俺の形相に、不思議な顔をする藤尾真紀。

ここまで触らせておきながら当然の疑問といえは当然。

「変なの。でもそこまで言うんなら無理には見ないよ」

「わりい」

「じゃあ知らないよ。下着の中で出しちゃっても」

「だ、出すって何を？」

「もうっ！そんなこと女の子の口からに言わせないでよ」

（あ、そっか。精子のことか^^;）

「ごめん。それはなんとか我慢する」

「えーっ？無理だよそんなこと。内海くん感じすぎだもん」

「いや、出すのを我慢するんじゃないくて、出してパンツが汚れても我慢するってこと」

「気持ち悪いよそんなの」

「だからなるべく藤尾が……いや真紀が疲れてイヤになるまで耐えるさ」

「あ、言ったね。じゃあ私、容赦しないからね。（*・・・*）ウフフフ」

真紀は俺の下着の上からはち切れそうになった俺のアレを口で愛撫し始める。

やがて、先っちょの方は口で。根元は手で激しく俺を責め立てた。

「あっ、あっ……うううくっ……んああ」

結局、真紀の怒濤の口撃の前にあっさり撃沈した俺。

耐え続けるどころか、ひとたまりもなかったのだ。

「うっ……！」

このフィニッシュで、見るも無残に俺のパンツは精子まみれになっってしまったのだった。

「あゝあ、だから言ったのに。ティッシュならあげるけど」

「ごめん。ちよつと向こうで拭いてくる」

「それほど見せたくないんだね。まあ理由は無理には聞かないけど」
「ちよつといろいろあつてな（・・・）」

とりあえずは一件落着した。

濡れたパンツを廊下で脱ぎ、結局ノーパンのままズボンをはいて真紀の部屋に戻った。

「ふう……真紀さ、お前へタクソなんかじゃないぞ。むしろうまい」

「ありがと。そう言ってもらえると嬉しい。私の彼氏が不感症のかもね」

真紀はニコニコ笑顔で上機嫌になっていた。

「これで俺が役に立ったというわけだよな？」

「うん。じゃあ次は内海くんの番だよ」

「あ、そっか。そうだった」

「自分だけ満足しちゃいけません。女の子も満足させてね」

「でもホントにいいのか？俺は彼氏じゃないんだぞ」

「私はこう思うの。Bは単なるスキンシップ。エッチじゃないって」

「……はは。なるほど（＾―＾；）」

（続く）

8話 夕暮れ気分（前編）

オレンジ色に染まった空。

別に火災でも天変地異でもない。紛れもなく美しい自然現象。

久々に見た真っ赤な夕焼けに、ちよつとだけ柄にもなくロマンチックな気分になった。

藤尾真紀の家からの帰り道。いつも通る道と合流するのはもう少し先。

違った道を歩くと当然違った風景も目に映るわけで、思いもよらぬ新鮮な感覚に、俺の気持ちが少し和んだ。

歩きながらふと、さっき帰り際に言われた真紀の言葉を思い出す。

「ごめんね内海くん。今度また……しようね」

謝られた上に「今度またしよう」だなんて、夢か誠か幻か。

まるで俺が勝手にウソぶいた妄想話のようだ。でもこれはまさしく現実な話。

真紀が俺にごめんねと言ったのには二通りの意味が考えられる。

一つ目は、俺を無理やり誘ったことに対して。なんせ俺には渚子という彼女がいて、真紀も当然そのことを知っているのだから、少しはうしろめたい気持ちがあるのだろう。

二つ目は、最後のプレイで俺がしくじったことだ。本来なら謝るのは俺の方。でも責任を感じたのか、真紀が俺に気を遣ってくれたのかもしれない。

それは攻め手が真紀から俺に選手交代して、わずか数分後の出来事だった。

真紀は自ら服を脱いで下着姿になる。

「本当なら男の人が女の子の服をやさしく脱がしてあげるもんなん

だよ」

そう言って真紀は自分のベッドに横たわる。

「でもそれは省略。渚子にはちゃんとやってあげてね」

「うっ、うん」

俺は思わずゴクリと生つばを飲む。真紀の下着姿に興奮せずには
いられない。

「いいよ。内海くん。慌てなくていいから、ゆっくりやさしくね」
そう言われるほど俺の鼓動が速く高鳴ってゆく。

（ダメだ。もっと冷静にならないと……もっと冷静に）

真紀のブラジャーの上から包み込むようにソフトタッチで胸をま
さぐる俺。

その先端部分は人差し指で小さな円を描いたり、親指と連携して
つまんだりする。

「あん……うっ」

真紀の口から漏れる声。俺の興奮度も増してゆく。

（くうくたまんねえや）

敏感に反応しているのは真紀だけじゃなく、俺の下半身も一緒だ
った。

（いかん。もっと攻め手に集中して、相手を気持ち良くさせてやん
なきゃ）

とにかくこれは学習なのだ。渚子と実戦するための授業に過ぎな
いのだ。そのためには興奮をできるだけ抑え、せっかちに攻めず、
じっくり時間をかけることが大事。

俺は真紀の胸をブラジャーを外さないまま、念入りに愛撫を続け
る。

すると、真紀の手が俺の右腕をとり、自らの下半身へとその手を
誘導した。

驚いて真紀の顔を見ると、彼女は目をつぶりながらゆっくりとし

た吐息を漏らしていた。

そして誘導された俺の手の指が、真紀の下着の上から指でなぞり、その動きを徐々に早くすると、それに合わせて彼女の吐息も小刻みな喘ぎに変わっていった。

「あ…あんつ。んっ…あっあっ……はう…」

こんな声を聴かされた日にゃあ、俺も相当ヤバくなってきた。もう俺の学生ズボンの真ん中にはち切れんばかり。もうすでに一度は出してるというのに。

「う、内海くん、ちよつと待って」

急に目を開けて行為にストップをかけた真紀。

「ごめん。痛かった？」

「ううん。違うよ。下着濡れちゃうでしょ。すぐ脱ぐからちよつと待って」

「Σ―11（；）―ええっ？いいのか？Bだけだろ？」

「そうだよ？」

「下着とつたらBにならないんじゃないかねえの？」

一瞬、ポカンとした表情の真紀が俺を見つめていた。

「あー、そういう認識の人もあるよね。渚子も内海くんと同じこと言ってたような…」

「あいつが？（^―^；）」

「うん。でも私はそうは思わない。お互い触りっこするだけなら下着があってもなくてもBはBだよ」

「そっか。藤尾がそれで構わないなら俺は別に」

「ほら。さっきも言ったでしょ。苗字は堅苦しいから真紀でいいって」

「あ、わりい>（；^―^）」

真紀は腰を浮かせて下着をスルツと脱ぎ、無造作にベッドの脇へ

頬に投げた。

「さ、続きしよ。早くしないとお母さんがパートから帰って来ちゃう」

「それって、すげえ焦るべさ」

仕切り直して再び俺は真紀の愛撫を開始した。しかも直接のタッチで下半身中心に。

俺にとっては初めての経験だが、ここで愛読書のエロ本たちが役に立った。

世界史の年号やら人物名は憶えられないが、エロ本の内容はスラスラ頭に入ってゆき、かなり豊富な知識は得ていたからだ。

真紀の秘部はかなり濡れていた。これが俗に言う愛液というものなのか。

もう俺の精神状態は興奮のるつぼ。これを抑えることなんて不可能に近い。

この俺の手が、真紀の大事なところを刺激すると同時に、顔を左右に動かしながら、せつなそうな表情で感じている彼女の様子を見ていると、俺自身いつ暴発してもおかしくない状態になっていた。限度にもほどがあるとはこのこと。そしてまさにそのときだった。

きつと真紀は無意識だったに違いない。

彼女は小さく喘ぎながらも自分の手を伸ばし、ビンビンに尖っている俺の股間をズボンの上からギュッと掴み、いきなり上下に激しく動かした。

「おう！ちよつと待つ……それ効き過ぎ……ダメだって……あつ、んあつ！」

真紀も興奮しているもんだから、俺の言葉など耳に入っていない

ようで、結局……

「うつ……！」

あまりにも無残。

わずか1分も持たずに俺は自分のズボンの中で果ててしまったのである。

（続く）

9話 夕暮れ気分（後編）

行く先に自販機が目にとまった。ちょうど良かった。喉も渴いたところだ。

それもそのはず。なんせ、真紀の家からバタバタしながら飛び出て来たのだから。

まさかあの場面で本当に真紀の母親が帰宅するとはタイミングが悪いかどうかというか、とにかく焦りまくったのは事実。

俺が不覚にも自分のズボンの中に放出してしまったあと、なんとも惨めにティッシュで拭きとり作業をしているとき、まさにそのとき真紀の母親がたたいまと一声をあげて玄関の扉を開けたのだった。「うわ、お母さんだ。内海くん、早くズボンはいて！」

俺はノーパン状態のまま一目散にベルトを締め、床に放り投げた自分のパンツを拾ってズボンのポケットに押し込んだ。もちろん真紀も慌てて服を着ながら部屋に消臭スプレーを振りまき、ベッドのしわを直し、自分の服装の乱れも整えた。

なんか一気に二人とも素に戻されて、さっきまでのエッチモードはどこへやら。

「俺、もう帰るわ。その方がいいべ？何か聞かれる前に」

「うん……そうだね」

そうは言っても後味の悪さが残るばかり。

結局、満足したのは俺だけで真紀にしてみれば不完全燃焼この上ない。

なのに真紀という女は心根が優しいというか心が広いというか、「ごめんね内海くん。今度また……しようね」と微笑んでくれるのだ。

こんなこと言われて喜ばない男はいない———と思う。けど余計に申し訳ない気持ちでいっぱいになったのも事実。

だいいち先にイッてしまったのは俺。それもあつという間の二回。なのに俺は真紀をイカせてない。それを学習するためにやったことなのに。

とにかく喉が渴いた。自販機のコーラでも買おう。

俺はズボンのポケットをまさぐりながら小銭を取り出した。すると――

「ゲッ！Σ（・ω・；――）」

手首にパンツが絡まっている。

すっかり忘れていた。汚れた自分のパンツをポケットに慌てて突っ込んでいたことを。

更に驚いたことに、俺の目に映っているのは自分のものだけではなかった。

なぜか女物の純白パンティも、洗濯物のように俺の右手に絡まっているのだ。

「ま、真紀のだっ（＾□＾；）」

そう。真紀が無造作に放り投げて脱いだパンティが、俺のパンツと同じ位置に重なっているとも知らず、焦っていた俺がそれを根こそぎ拾って来てしまったのだ。

「うわーっ！」

俺は小銭を握りしめながらも、手をバタバタを振って絡んだパンツ振り解こうとした。

すると真紀のパンツだけが俺の手を離れ、勢いよく五メートルほど吹っ飛んだ。

「ヤバイ。洗って返さないと……」

駆け足で真紀のパンティを取りに行く俺。そしてそれに手をかける瞬間、タッチの差でどこからともなく来た野良犬が、それを拾って走り出したのだ。

「ちよっ、ちよっ……おい！」

追いかけるしかすべはない。他人なら笑い話だが、俺にとっては真剣そのもの。

「待てこら！ざけんじゃねえぞ、この変態犬め！」

百メートルは追いかけたかもしれない。真紀のパンツをくわえた野良犬が急停止。後方の俺に振りかえった。すると俺の決死の形相に恐れを成したのか、パンツを地面に落としその場から走り去って行ったのである。

「しめた！やっぱ俺の気合いが通じたぜ」

と、犬に勝利したハイテンションもここまでだった。

「ぐはっ！（@ @・）」

落ちたパンツの目の前を、学校帰りの他校の女子高生が歩いていたのだ。

「キヤーなにこれ？」

一人の女子がそれをつまみあげた。

「今のワンちゃんがくわえてたよ？」

「じゃあワンちゃんのもでしょ？」

「キヤハハハ（　　）そんなわけないっしょ」

ちょうどそこに息を切らした俺が駆け付ける。

「あのそれ……えっとお」

話しかけたものの、どう話せばいいのかわからない。

「は？」

キョトンとした六つの瞳が俺を凝視する。

「いや……ごめん。なんでもない」

今更白々しいとは十分にわかっていても、俺にこれ以上しゃべる勇氣はなく、そそくさと彼女らの歩く方向と反対方向へ歩き去るしかなかった。かなりゆっくりとではあるが…

背後に三人がクスクス笑う声が聴こえてくる。

「変態だよあの人。きつとパンティコレクターだよ」

「キヤーやだ！わりと顔いいのにそんなことするんだ？」

「ああいうタイプに多いんじゃないかな」

「じゃあ佳奈美、返して来なよ」

「えー？ヤダよー」

「こんなの持つててもしょうがないでしょ。それともこのパンティはく？」

「キヤハハハ！ちょっと何言ってるのさ。それもつとヤダ！」

「じゃあこのままここに落として行こうよ」

「あ、それいい。そうしよう」

ここで俺の耳がビクンと反応した。

（しめた。回収できるかも……）

すぐに戻るのは相手も気づく。俺は住宅街の脇の細い道へ身を隠すすぐに反転し、角からそつとメイン通りの様子を伺う。すでに視界に彼女たちはいなくなっていた。おそらくどこかの筋道を曲がったのだろう。

（やっとこれでパンティを拾いに行ける（；-_-） 〓 3 フウ）

俺は駆け足でその場に向かい、誰にも見られずに真紀のパンティを再びズボンのポケットに押し込み、胸を撫で下ろした。

「やれやれ、今日は最悪な日だ」

どつと疲れが出たようで、俺はトボトボと帰り道を力なく歩いていた。

「やべえなあ。洗濯して返すにしても……さすがに母ちゃんには頼めないし、やっぱし俺が洗ってやんなきゃならんべなあ（-_-）

そう思いながらさっきの自販機前までにやっと辿りつき、コーラ

を買おうとした直前、背後から女子が小声でしゃべってるかすかな声が聞こえたきた。

「ほら、やっぱり拾った」

「シッ！声大きいってば」

「ここらへんの住宅を周って下着盗んでるんだよ」

「やっぱり変態に間違いなかったね」

「うんうん」

「家帰ったら匂い嗅いでるのかな？」

「違うよ。はいてるんだよ」

「アタシはきつと頭からかぶってると思うな」

「（* < ε > *）ぷっー」

「きゃははは（Ｔ　Ｔ）ノ　　ニ　　ばんばん！」

うかつだった。女子高生たちは俺が真紀のパンツを取りに来るのを物陰に隠れて待機していたのだ。しかもこんな時に自分の地獄耳が働くとは我ながらイヤになる。

（ちくしょう、あいつら好き勝手なことばかり言いやがって！）

恥ずかしさと屈辱で顔が真っ赤になりながらも、背後の声に振り向く勇気が俺にはなく、一秒でも早くこの場から遠くへ離れたくて早足になった。

十五分ほど歩いただろうか。喉の渇きが激しくなっていた。そういえばさっき飲み物を買ってそびれてしまったせいだ。

ほどなく歩くと自販機はすぐに見つかった。今度はしっかりと小銭を出してコーラを買い、喉を潤して一息ついた。

「ふう」

どうやら気持ちも落ち着いていた。まわりにはもう女子高生も野良犬もない。

俺はコーラをちびちび飲みながらゆっくりと歩き始め、住宅街を通り過ぎた。

街を流れる川べりを歩いていると、二、三百メートル先に掛かっている橋全体に、とつぷりと夕陽のオレンジが浸食されている光景が目に見えついた。

「すげえ……空と橋の融合じゃんかあ。渡ってみてえなあ」

思い立ったら今のうち。俺はダッシュで目的地へ。

息を切らしながら橋の真ん中まで辿りついて立ち止まると、欄干に肘をついてオレンジの空を見上げた。こんな場面、青春ドラマのワンシーンにはもってこいだ。バカヤローと叫ぼうか好きだと叫ぼうが、画になるカットには違いない。まあ、もちろんそんなマネなんかするつもりはないが。

人通りもない橋の上。心地良いそよ風と夕暮れが本当に綺麗で、しばらくそこから動けなかった。

今まで脳内がエッチのことで埋め尽くされていたこの俺が、なぜかおセンチになってしまう不思議な感覚。そしてこの感傷的な気持ち俺の工口度を奪っていった。

そう、俺はこのとき、急に自責の念に駆られてしまったのである。

——バカだな俺って。ホントに何てバカなことやってたんだろ。

——ああ、渚子なきやうこに悪いことしてしまった。

——Bでも、やっぱりエッチはエッチだよなあ。

——渚子なきやうこごめん。許してくれ。俺が間違ってた。

橋の上で深い反省に打ちひしがれながら、俺は決意を新たにしたい。(よしっ！もう真紀に誘われても絶対ヤラない。その分、渚子に目を向けて努力しなきゃダメだ。たとえ俺のエッチがヘタクソでも、気持ち伝われれば渚子ならわかってくれる。

俺はすでに飲みほしている缶コーラをグシャッと握り潰し、ゆっくりと歩き始めた。

今週末のデートこそ、渚子と初体験を成功させるんだ！いや、絶対成功してみせる！

こう堅く心に誓った俺であった。

「とりあえず真紀のパンティ洗って、明日のうちに返さなきゃな」
「……」

（続く）

10話 放課後の誓い

あの時からイヤな予感是一直していた。

それは俺が学校の廊下で、真紀と立ち話をしていた姿を渚子なみこに見られた時。

別に楽しく話し込んでたわけじゃなく、ほんの短い用件に過ぎなかった。

理由は単純。前日持ち帰ってしまった真紀のパンティのことだ。実はというか、やはりと言うべきか、家族のいる中で真紀のパンツを洗濯するチャンスなどなく、この日返すことができなかったのだ。

普段から母親任せの洗濯を、急に俺が自分ですると主張するのも、不自然過ぎて言い出せなかったというのが正直なところ。

そんないきさつを真紀に説明していたところに渚子を通りかかり、立ち止まった。

当然のように彼女の目は疑いのまなこそのもの。

だが、そこは真紀の機転が利いていた。

「あ、渚子。ちょうど良かった。今ね、あんたと内海くんのおのろけ話を聞いてたんだよ」

「おのろけ？」

「うん。内海くんはね、渚子と一緒に帰れない日はとーっても寂しいんだって」

そう言っただけ俺に合図を送るようなチラ見をする真紀。ここは白々しくならないような芝居が要求される場面だ。

「そんなこと大きな声で言うなや。恥ずかしいべや」

「でもそうなんですよ？」

「さっきそう言ったべ！何度も聞くな」

「あーごめん。つい野次馬根性で人のこと聞きたくなっちゃうの私」
「俺も真紀の彼氏のこと根掘り葉掘り聞いちゃるか？」

「いいよ。私全然平気。だから内海くんも正直に答えるんだよ？」

「もうほっとけ」

「あーまた照れた。じゃあもうわかったからいいよ。あんまり苛めでも渚子に悪いし」

渚子は俺と真紀のやり取りをキョトンとした顔で見ていた。

「ごめんね、渚子。私、これから彼と待ち合わせあるから行くね」
「う、うん…」

アドリブの小芝居がプロ並みな真紀。内心すげえと感心しきりな俺だった。

そういう俺も、アドリブ返しをなんとか嘸まずに済み、いらぬ疑念は免れたようだ。

おかげでこの場は何事もなく、俺は部活の終わった渚子と帰りを共にしたのである。

この日の俺には作戦があつた。そう、今日こそは渚子を俺の部屋に招き、童貞とおさらばしてしまおうという重大なイベントの計画だ。

母親の今日のスケジュールは、遅番のパートで帰りも遅い。

妹の小春は、友達の誕生パーティーにお呼ばれしていて、これまた帰りが遅い。

まさに今日は最高の日であり、絶好の日なのだ。

しかし少々面倒なこともある。昨日持ち帰った真紀のパンティを今日中に洗濯しなければならぬことだ。

でもプラス思考で考えれば、家に家族がいないということは、洗濯も楽勝で出来るということだ。俺の洗濯物と一緒に真紀のパンツも混ぜ込んで洗ってしまえば何の問題もない。

「渚子、これから俺んち来いよ。今日は家に誰もいないし」

「行っているの？」

「全然OK！」

「そつえばまだゴーちゃんの家、いつぺんも行っていかなかったもんね」

「来るべ？」

「……うん。じゃあ、行ってみよっかな」

気づかれぬようにほくそ笑む俺。よしよし、まずは幸先順調。

「ゴーくん、なにニヤニヤしてるの？」

（ゲッ！Σ（・ω・；）——気付かれてた……（^□^；A）

「そ、そんなことないって。俺はいつもこういうニコやかな顔だし」「フフツ。そっかぁ……」

苦し紛れな言い訳を悟られたのか、渚子にフツツと笑われたのが気にはなったが、幸いにも渚子からの突っ込んだ質問はなかった。よしっ！今日の俺はついてる。テレビで朝の占いコーナーは観て来なかったが、きっと俺の運勢はいいに違いない。

あとは実行あるのみ。勇気と行動力をもって突き進むだけ。

ついに俺の童貞喪失までのカウントダウンが始まる。いや、もう始まっているのだ。

俺は誓う。今日は先にイカない。絶対に！渚子を徹底的に愛撫して、トロトロにさせてイカせてから……う、ヤバい。考えただけでアソコが立ってきやがった。

「ちょっとトイレ行って来るから待っていてくれ」

「え？う、うん」

俺はやや前かがみになりながら大使用のトイレの中に駆け込み、溜め息をついた。

（ダメだ。我慢できねえ！）

そつ心で叫んだときにはもう、俺の手は自分のアレを激しくピストンさせていた。

反省はいつも事が終ったとき。ひとりえっちの虚しさが沸き起るのもこのとき。

でもここでメゲてるわけにはいかない。頭の切り替えが必要だ。そうだ！プラス思考に考えれば、ここでいっぺん抜いたってことは逆に好都合。俗に言う早漏的な事態に陥る確率が減るということだ。

俺は一気に自信が沸いてきた。変な話だが、ひとりえっちをする前よりも。

ちよつと回り道はしたが、今日はなんとしても渚子との初体験を成功させねばならん！

と、ここで俺は下らないダジャレを思いついてしまう。

「性交を成功させる！（＊ m ＊）ププッ」

明らかに渚子にはドン引きされてしまうこのダジャレ。

決して彼女の前でや口にするべきものではないと、この場で封印した俺だった。

（続く）

11話 念願の初体験？

計画は良い流れで進行していた。

誰もいない俺の家に渚子を部屋まで案内し、買い置きしていたメロンアイスを冷蔵庫から持つてくる。当然、渚子の好物だということを知った上でのことだ。

さすがに、ムードもなしにいきなりエッチするわけにもいかない。二人で雑談しながらそれを食べ、コンポでニューミュージックを聴く。頭の中ではどのタイミングでキスをしようかと、そればかり考えながら。

コンポは以前、従兄のアニキから譲り受けた音質の良い上物で、俺がリラックスするには非常に役に立った。ただ、かけた曲があくまで俺の好きな女性アイドルばかりなもので、渚子が心地よく聴いているかは疑問だった。

「ごめんな。渚子の好きな近藤真彦の曲がなくて」

と、気をまわして言ったことが、逆に自分の首をしめることになった。

「え？ゴーくんアタシがマッチ好きだってどうして知ってるの？」

「Σ―11（ ; ）――1」

（そうだった。これは真紀から聞いて知ったことだった）

非常にマズい事態だが、ここで迅速に対応しなければ怪しまれる。ほら、こないだ言ってたべや。マッチが好きだって。俺、聞いたぞ」

「アタシから？」

「ああ。間違いなく聞いた」

ここは自信を持って言いけることが大事だ。

「そうだったっけ？……そっかあ、そうだったかもね」

（よし、いい方向性だ）

「たいして重要なことじゃないから憶えてないだけだろ」

「うん……きつとそうだね。アハ。でも記憶力には少し自信があったんだけどな……」

「まあ気にすんな。誰でもそんなことくらいある」

「うん……」

一瞬ひやつとしたが、渚子からはそれ以上のツツコミもなく、事なきを得た。

さっきキッチンへ行ったついでに、あらかじめ用意していた俺の洗い物と、真紀のパンツも洗濯機にかけている。全ては順調に進んでいた。

だがここで俺は気づく。

部屋の小テーブルに向かい合って座る俺たち二人。これがいけない。

うかつだった。最初にアイスを食べるときから並んで座るべきだったのだ。

渚子は俺のベッドサイドに背をもたせながら床に座っているのだから、俺がとなりにいればごく自然に、キスからボディタッチへと仕掛けることができる絶好のチャンスだというのに。

もし今の状態から俺が急に立ちあがり、渚子のとなりに座り直すのはあまりにも不自然。まるでヤリに行く態勢が見え見えだし、渚子もきつと警戒する。

一体どうしたらいい？ 答えは今すぐ出さねばならない。

要は、どうしたら不自然に思われないで渚子のとなりに座るかだ。にわかな緊張で喉も渴いてきた。とりあえずここは何か飲み物で

も……ハッ（。〇。；）

——そうだっ！これだっ！

天から降って来た些細な知恵。大げさな表現なのはわかってる。俺は飲み物を取って来る口実をつけてキッチンへ行き、冷蔵庫か

らオレンジジュースを見つけ、グラスと共に部屋に運ぶ。そしてそれらをテーブルに並べて置くと同時に、渚子のとなりにごく自然な形で腰を落ちつけることができたのだ。

（よっしゃあ！これでいよいよ本番だべ！）

ジュースで乾杯する俺たち。グラスをカチンと合わせて一息に飲んだ。

二人とも、テーブルにグラスを置くと、自然に微笑みながらお互いを見つめあう。

近づく顔と顔。コンポから流れる曲は松田聖子のシングル、風は秋色。

あなたの腕の中で旅をする♪

Oh、ミルキイスマイル抱きしめて♪

やわらかなその愛で♪

（おおー！この歌詞タイミングピタシヤンけっ！）

と、心踊りながらも表向きは出来る限り冷静を装う。

渚子が徐々に薄目になる。明らかにキスを受け入れる態勢が整っている。

俺もこの場面で目を閉じ、そつとキスをした。

重なる唇。そのままの状態から、俺はそつと彼女の肩に手をまわし、更に強く唇を密着させた。ここで舌を入れるべきかと、若干の迷いは生じたが、今はまだ入れないでおこうと思った。それにはもつとエッチな気分にはさせないといけない。

俺はお互いの唇をほんの少しだけ離してはまた重ね、それを何度も繰り返した。

まあ、手っ取り早く言うと、チュッチュチュツチュツしたということだ。

「んふっ…」

彼女の口からセクシーな声が漏れる。

（よし、いける！今日は絶対いける！）

この勢いに乗って、俺は渚子の胸を優しくタッチし、敏感なその先端部分を人差し指で円を描いた。 ゆっくりと…そして時折小刻みに。 全てはこっそり読んでいたエロ雑誌や官能小説からの知識だ。

「あん…」

唇が少し離れた瞬間に、渚子から漏れた声。

（やった！間違いなく渚子は感じている！）

確信と共に、俺の興奮度は一気に昇り詰めていったのである。

（続く）

12話 快樂と冷静の間

最初に仕掛けていたのは俺だったが、少し遅れて渚子からのアップローチも始まっていた。

今までこんなことは一度もなかったから、一瞬驚いた俺だが、そこは態度に見せないように心掛け、この絶好のチャンスを必ずものにしようと心に誓った。

お互い敏感に感じる箇所へのボディタッチ。しかも唇を重ねながらの行為に興奮度も増すばかり。俺の手は渚子の胸に。そして渚子の手は俺の堅くなった下半身の熱い部分に。
「すごい……大きい」

唇が少し離れたときに彼女が薄目を開けて俺にそう言った。

「渚子のエッチ」

俺がニヤツと笑って言うと、

「そんなこと言うんだったらもう触らない」

と、渚子はその手をすぐに引っ込めた。

「え？別にやめるとは……」

——ヤバい。余計なこと言っちゃった。

「アタシ、そんな言い方されるのあんまし好きじゃない」

「ご、ごめん。俺が悪かった。もう言わない。言わないからその……」
と、俺が先の言葉に詰まったところを渚子が突っ込んだ。

「え？言わないからその……って何なの？」

「だからそのさ、えっと……続きをちよっと……」

「続きって？つまりどういうこと？」

渚子がいたずらっ子そうな目をしている。

——はあ、なるほど。

つまりは俺の言いたいことをわかった上で訊ねているのだ。でもまあ、とりあえずは腹を立ててはいないようで、その点では助かつ

たと言える。

「なんだか主導権が渚子に移っているような気もしつつ、俺は渚子の質問に答えていた。」

「そのさ、渚子が……触ってみたいってんなら、俺は全然構わないけど」

渚子が短い溜め息をつく。

「そうじゃないでしょ。アタシじゃなくて、ゴーくんでしょ」

「な、なにを……？」

渚子の意外な強気に少し驚いた俺。

「男の人ってみんな、アレ触ってもらいたいんでしょ？」

「いや別にそんなことは……」

「正直に」

「まあ、ちよつとは……」

渚子がクスツと笑う。

「最初からそう言えばいいのに」

彼女の言葉に確信を得たスケベな俺は、つい調子にのって余計なことを言ってしまう。

「渚子は、その……舐めたりできるのか？」

渚子の目がまあるく見開いた。

「ちよつと！ゴーくん何言ってるのさ」

渚子が俺の肩をパシツと叩いた。顔はもう真っ赤になっている。

「ちよつと聞いてみただけだべ。してくれとは言ってない」

「ゴーくんこそすつごくエッチじゃない。そりゃ前からわかってたけど……うっ！」

俺はつべこべ言う渚子の口をキスでふさいだ。肩に手をまわし、さつきよりも少し強めに吸引した。すると、彼女はキスに対しての抵抗は全くなく、逆に部屋で二人きりのシチュエーションに陶醉してゆくようにさえ感じられ、俺に身を任せているかのようにだった。

更に高まってゆく興奮の中で、つとめて冷静を保ちつつ、俺の右手は渚子の胸のふくらみから下半身の秘部へと移動しつつあった。

「あ……」

秘部に触れた瞬間、渚子から漏れるセクシーボイス。俺の下半身も更に硬直していた。

そしてまさに、そのタイミングで彼女の手も俺の硬直した部分を力強くギュツと握りしめたのだ。

「うー！」

それは驚きではなく、脳天にまで響いたあまりの快感に、俺の漏らした声が呻きに変換されたのだった。

「ウフ。男の人も声出すんだね」

と、不意に渚子からも真紀と同じことを言われ、自分のMツ氣にこっ恥ずかしくてたまらなくなりながらも、急激に押し寄せる快樂には到底勝てるものではなかった。

全ては順調に進行していた。

多少の不安材料としては、俺が先に果ててしまわないことだった。そう。俺の童貞喪失を実現するにはかなりの忍耐が必要なのだ。そのためには自分が受け身ではいけない。念入りの愛撫で、渚子の体も精神もとろとろにとろけさせておかなければならないのが絶対条件なのだ。

「あ……あう……あん」

そしてまさに今、官能小説とエロ漫画で培った知識と技術が功を奏し、花を咲かせようとする直前にまで来ていたのは確かだった。――そう。確かだったのに……

（続く）

13話 あわれゴースケ

突然の妹の第一声に、俺は飛び上がって驚いた。

正確に言えば飛び上がるほどの思いということだ。

「ちよつとさあ、これお兄ちゃんの洗濯物……うわーっ！ やらしー
Σ（ノ。。ノ）」

——なんということか！

小春がカゴに入れた俺の洗濯物を持ち、開けたドアのそばに立っていたのだ。

「お、お、おまおま、お前っ！ 何で勝手に入ってくんだよ！」

俺は密着していた渚子から素早く離れ立ち上がり、わけもなく腕や足を曲げながらラジオ体操まがいのことをしていた。

渚子は慌てて胸元の服装の乱れを整えようと必死だった。

薄々察しがつくはずなのに、気が利かない小春はすぐには部屋を出て行くとはしない。普通なら目のやり場に困って出て行っても良さそうなものを、シャアシャアと言い訳まで言い始める。

「だって、洗濯機止まってたから早く干さないと衣類がシワになるじゃない」

そう言われても俺はそっけない返事しかできなかった。

「あー、はいはい。わかったから」

「わかってないくせに」

徐々に募るイライラ。

「てか、お前何で家にいるんだよ。友達んどこに行くって言ってたべや」

「学校帰りに直接行くななんて誰も言っていないでしょ。ちゃんと着替えてからだもん」

（全くこいつは、こんなときにいちいち一問一答しなくてもいいものを……）

「そんならちゃんと前もって教えておけってんだよ」

「そんなこと……」

言いかけた妹の言葉が途切れた。さすがの小春も今の空気を感じたのか、どうやら長居は無用と判断したようだ。それもやっと。

「はいはい。今度からそうします。私も忙しいからもう行くよ」

「おう、そうしてくれ」

きびすを返した小春が部屋を出て、ドアを閉めようとする直前、不意に顔だけこちらに覗きこみ、不敵な笑みと興味津々な表情をあらわにしながらい放った。

「お兄ちゃんだって、ちゃんと鍵しとけば良かったでしょ。そして好きなだけエッチなことできるのにさ。ウフッ」
「なっ……」

焦りまくりの俺は、絶句とも言える言葉しか出なかったが、ふと渚子を見ると意外にも冷静で、やれやれといった風な表情で俺と目を合わせた。

「ごめんな渚子。まさか妹がいるとは思わなかったんだ」

「いいよ別に。ビックリしたけど親じゃないから」

「そっか……」

「ゴーくんの妹だって、あんなに可愛いからきつと彼氏いるよ」

「そんな情報聞かないけどなあ」

「もうエッチだってしてるかも」

「まさか！俺を出し抜いてそんなことは……」

「その考え方、なんか変（^ー^；）」

その後、妹騒動もなんとかおさまり、俺はこの場を仕切り直そうと渚子に顔を近づけた。

「ちょっと待って！」

「（・・）ン？」とした？」

「ゴーくんの妹も言ってたでしょ。洗濯物はすぐ干さないと」

そう言つて渚子が立ち上がる。

「そんなあとでいいって。どうせ俺のだから」

「めんどくさいだけでしょ。私がやったげるから」

渚子が洗濯物の入ったカゴに手をつけた。

(。○。;) ハッ! しまった!

とっさに思い出したマヌケな俺。今そのカゴの中を見られるわけにはいかないのだ。

「あー、それは俺がやるつてば」

そう不自然に叫んで渚子の片足をつかんでしまったため、彼女は前のめりに転んだ。

しかも最悪なのは、すでに片手がカゴに引っ掛かっていて、渚子が転ぶと同時にカゴも倒れ、洗濯物が床にぶちまかれてしまったのだ。

(うつ!)

と、心で呻いたのは俺。

どうしてこんなにタイミングが最悪なのだろうか。

カゴから真っ先に飛び出ていたのは、まさに真紀のパンティそのものだったからだ。

当然、渚子がそれを見逃すはずもなく、むしろパンツをつまみながら起き上った。

「これ誰の?」

横目で俺を見る渚子。

「それは……うちの母ちゃんのではないことは確かだな(^ □ ^ ;

A)

「じゃあ、あの可愛い妹のだね」

「あ、そうそうそうそう。俺、あいつのパンツ見ないからわからんけど、きつとそう」

「……」

この度重なる俺の不自然な言動が疑いを招いた。

最初から冷静に「ああ、妹のパンツが混じってたのか」くらいに言っておけば良かったものを。今更もう取り返しがきくわけでもない。

「俺があとで小春に返しとくから……まあこっち来て座れよ」と言っても後の祭り。

「ウソ！」

「ウソじゃないって」

「この下着誰の？妹のじゃないでしょ？」

「い、妹のだって。そ、そういえば小春の風呂上がりに見たことがあるし」

「へえ。実はね、アタシも見たことあるの。この柄の下着」

Σ—11(「:」——1

「この前の体育の授業のときにね」

「たいく……？(・…:)」

「着替えのときに見たの」

(○○○;) ギクウウウー！！

「この下着、真紀が履いてたよ」

ガ ΣΣ(。D;) ンー！！

ここにひとつの恋が終結した。

(続く)

第3章 ささやかな遍歴 1話 ギャップのある彼（前編）

1990（平成2）年

内海くんの披露宴から一夜明けた朝。というか起きたらもうお昼。ゆうべ二次会で飲み過ぎたせいもあるけど、ここまで爆睡するの、も久しぶり。

目覚めは悪くない。お酒にわりと強い私には、二日酔いの経験なんてない。

ただし、ゆきずりの男と勢いでホテルに泊まっちゃったときなんかは、二日酔いのふりをすることもある。その理由はただひとつ。私は起きがけの朝エッチが大好きだから。

ちよつとした小芝居だけれど、これが結構楽しくてハマる（*
, *）ウフフフ

けだるい体で、完全酔いも冷めきらぬまま甘えたふりをすれば、男は必ず興奮して私を抱く。そんな状態でなすがままにされる朝が、私にとっては限りなく心地よい瞬間。

でも最近はやきずりの男ともご無沙汰。今は気まぐれなSEXフレンドとも連絡がとれないし、ストレスも溜まる一方。これじゃ風邪なんてひかなくても体調が崩れてしまう。

こうして悶々としながら起きた正午前、私はふと内海くんの顔を思い返したのだった。

——彼、昨日の初夜はうまくいったのかしら？

私は両手を頭の後ろに組んで、もう一度ベッドにドサツと仰向けになった。

別に内海くんとお嫁さんの初夜を想像してるわけじゃない。

思い起こすのはそう、かつての私と彼の思い出。

それはまだお互いが未成年だったころの話。そしてそれはまさに、彼が自分の童貞を私に捧げようとしている時でもあった。

1983（昭和58）年

高校を卒業すると、みんな一斉に車の免許を取ろうと教習所に殺到する。

もちろん私もその例外ではなく、それは内海くんも同様だった。

彼の存在は知っていたけど、学校ではクラスも違っただし接点もなかった。きっかけは真紀。私の親友。でもある彼女を通じて言葉を交わすようになっていた。

真紀は高一のときに内海くんとBまでしちゃったらしい。でもその程度のことなら驚きもしない。私自身、もう十四歳のときには初体験なんて済ませてるし。

でも私が驚いたのはそんなことじゃない。真紀も内海くんもお互い彼氏彼女が別にいるにも関わらず、エッチが上手になるための練習として割り切っていたこと。

さすがの私もわずか十六歳ではそこまでの精神状態には達していなかった。

そしてその事実を知ること、もうすぐ十九歳になろうとしている私は、内海くんに対して大胆な行動に出ることが出来たとも言える。

実のところ、彼はわりと私のタイプ。髪は当時のたのきんトリオを思わせるようなアイドルヘア。二年くらい前までは横浜銀蠅に憧れていたみたいで、髪にグリースべっちょりのロックンローラー的な風貌だったのを、学校の廊下や登下校で見かけたこともある。

とにかく私は内海くんにモーションをかけてみた。今現在、彼女がいようがいまいが、真紀との一件もあるのだから関係ない。私もちょうど彼氏が途切れたところだし、軽いスキンシップには内海くんがまさに最適。

「ねえねえ内海くん。今日のコース終わったらどつかでお茶しない？」

「ん？真紀と何人？」

「真紀はデートがあるんだって。だから私と内海くんのデートってこと。ダメ？」

私はこんなこと平気で言えちゃう人。もし断られたら「なーんだ、今日ヒマだったのに残念。じゃ景山くんか水野くんでも誘おっかな」くらいに言えばいいだけ。

でも彼はまんまと私からの誘いに乗って来た。

セクシーさにはちよつとは自信のある私。これまでも彼には何気にボディタッチしたり、チラ見程度の思わせぶりな目配せをしたり、間接的なアピールはしてきたつもり。私の誘いが蹴られるなんてことは絶対ないと確信していた。

まだ何もしていないのに、私の胸の中が徐々に熱く萌えあがっていくのがわかった。そしてそれは、高校時代からエッチないたずらで有名だった内海くんも同じだろうと、私は彼の表情から読み取った。この私の勘は、数時間後には正しかったことが証明されることになるんだけど、ちよつと私の思ってた彼のイメージとは違っていたことが明らかに。まあ、それはそれで色々と楽めた部分もあったんだけど。

——童貞。率直に言うと、あの内海くんがそうだったとは思ってもよらなかった。

真紀とBをしながら、しかも別に彼女もいたはずの彼がまだ童貞。この事実が私の行動をより大胆にさせることになる。

（私の自由に内海くんをいじれちゃう（*´・`*）ウフフフ）

元々、彼にはM性があったんだろうけど、実際まだドMだった私が、Sにも目覚めさせてくれたのが内海くんということになるのか

もしれない。

教習所の帰途から降り出した雨が私の思惑に味方した。

「内海くん、うち来ない？」

「いいけど美緒んち、親いないのか？」

「いるけど、私の部屋離れてるから」

彼の下半身にわずかな膨らみが出来たのを私は見逃さなかった。

（続く）

2話 ギャップのある彼（後編）

母の寝室の前を通って階段を上らないと、二階にある私の部屋には行けない。

案の定というか、ちよつとだけ気になっていたことが現実になった。

実はこのとき、母のボーイフレンドが寝室にいたから。

うちは母子家庭だから不倫にはならないんだけど、母は十歳年下の彼氏にどっぷりハマっていて、彼氏が来るなりすぐ寝室へ直行し、あからさまにエッチが始まる。

それはそれで構わないんだけど、母の萌え声があまりにも大き過ぎる。（^ー^；）

私はもう聞き慣れてるからいつも受け流しちゃうことができるけれど、たまたまうちに来た内海くんにとってはかなりの刺激になったようだ。

「あああああゝ！んんっ！あっあっあん」

ボーイフレンドはわりとテクニシャンらしく、母の喘ぎが大胆になったり小刻みになったりするの、男のする愛撫に比例しているのがよくわかる。

私がチラッと内海くんを見ると、すでに彼は自分の股間を両手で押さえていた。

「どうしたの？」と、わかっていながら興味本位に聞く私。

「この部屋……何？」と、わかっていながら私に聞く内海くん。

「内海くんの考えてる通りだと思うけど」

「ここ、美緒のお母さんの部屋だべ？」

「そうだよ」

「お母さん、具合悪くて唸ってるんじゃないのか？」

「それ、本気で言ってるの？じゃあドア開けて見に行けば？」

「いや、それはいいけど」

「ホントはそんなこと思っていないくせに」

「いやいや、そんなことは……」

「じゃあその押さえてる両手は何？」

内海くんがビクンと反応して焦り出す。

「う……これはちょっと……」

「やっぱりわかってたんじゃない」

「てことはその、セツ……」

「そうセツクス。うちのお母さん、エッチ大好きなの」

「Σ―11（「；）――1くはっ！そんなあからさまに」

内海くんの両手は益々股間から離れなくなっていた。

「こんな所でこすらないでよね（*’、’*）ウフフフ」

「バ、バカ。何言ってるんだ。誰がそんなことすつかい！早く美緒の部屋行こうぜ」

焦りながら否定した内海くん。

彼はきつと私がいじった方が面白いかもしれない。

私の部屋に来て、内海くんは落ち着きがなかった。

「あー驚いた。美緒のお母さんすげえな」

やっぱり彼には強烈な刺激だったらしい。

「いつもあんなだし、私は慣れっこ」

「いつもなんだ……（^―^；）」

こんな前座があった今、私が彼を誘惑するには何の苦勞もいらない。私の思惑もすんなり進むから、母の一件はまさに好都合。

「ねえ内海くん、聴くよりする方が好きでしょ？」

「え？」

「さわってあげる」

私は内海くんのとなりに座り、そつと彼の膨張した下半身部分へ

手を伸ばす。

こんなスケベな彼が拒む気なんて毛頭ないことは一目瞭然。

でもここで「さわつてもいい？」なんて聞くと、心と口とは裏腹な答えが出るのはよくあること。私は一切、問いかけはしない方針でストレートに離しかけた。

「すごい。さつきより大きくなってるよ」

「そんなことは……」

「言い訳はいから。ファスナー開けるよ。下着の上からね」

「しょうがないなあ。美緒は」

「へー、そんなこと言うんだ。じゃやめる」と私が言うと、

「いやいや、やめるとは言っていないべさ」と、うつむき加減で言う内海くん。

（わかってるよ。そう言わせたかっただけよ。（*´・´*）ウフフフ）

「じゃ続けるよ」

「あ、ああ」

M度満点の内海くんに興味津々な私は、さっそく彼のアレを軽いタッチで上下にさすりながら、ときにはキュツと強弱をつけて握ったりゆるめたりを繰り返すと、

「あつ」とか「うつ」とかいちいち反応する内海くんがとても可愛く見えてきて、逆にちよつと意地悪したいような気にもなってきた。そんな私がふと思いついたこと。それは……

「内海くん、これ朗読して」

私はテーブルに置いてあった読みかけの恋愛小説を彼に渡し、しおりの挟みである部分から読ませることを思いついた。もちろん私が彼の下半身への刺激を続けたままで。

面白いことに、内海くんはすんなり言うことを聞き、本を手に取り読み始めた。こんな嗜好もまんざら嫌いじゃないらしい。彼のM度はかなり高いみたい。

「俊之は友美の肩を抱き寄せ、二人夜空を見上げ……あう」

「ダメダメ内海くん。『あう』なんて書いてないよ。ちゃんと読んで」

「う、うん。わりい」

不思議なくらいに素直になる内海くん。まさにMの特性。

朗読を乱そうと、彼の表情を見ながら下半身の敏感な部分に強弱をつけながら刺激を加える私。この時点で興奮してるのはむしろ私。満天の星空の中、愛し合う俊之と友美は……んあっ！うっ」

「ほらまたあ。我慢我慢！しっかり読み続けなきゃダメ！」

内海くんの耐えながら朗読する顔がセクシーでたまらない。

真紀から内海くんは早漏だって聞いてるから、鍛えてあげるには絶好のチャンス。

「そんなこと言っただって、美緒の手がだんだん早くなるからじゃ……うぐっ」

ギュッと強く握るたびに大きく喘ぐ内海くん、私は虜になりつつあった。

下着の上からでこんな過敏なら、直接触ったら彼どうなっちゃうんだろ？

「美緒、もう俺、イク……イキそうだ。ああもう……」

「ダメよまだ。そんなに早くイッたら女の子にガッカリされるよ」

「あ……くっ……う……んああっ！」

「ダメ！下着の中で出しちゃったら汚れちゃう……」
「うぐっ！」

内海くんの体が後ろにのけぞり、動きが止まった。

言っまでもなく、彼はフィニッシュを迎えてしまった。ここまで

わずか三分。

（ちよつと早すぎるかも――；）

その後二カ月、内海さんと付き合つてはみたけど、いくら私が鍛えてあげても一向に早漏は治らず、何よりも彼は下着を絶対に脱がないから、セックスまでには一度も至らない。普通、男なら女の子にフェラしてもらいたくてたまらないはずだし、セックスだってしたいはず。なのに下着の上から触るだけで本当に満足してるんだらうか？理由を聞いても恥ずかしいの一点張り。それなら部屋を暗くしようかと言つても無駄だった。

結局、しびれをきらした私が彼との幕引き決意することになった。私が一方的に彼を鍛えても、私自身の悶々としたストレスにしかならないから。

外見から判断すると、グイグイ女性をリードするような締まった体をしているのに、実際は単なるDM男。

今考えてみると、内海くんはきつと包茎だったから、私に見せたくなかったのかなーなんて思ったりもする。

まあ、これも今となってはひとつの良い思い出なんだけど。

（続く）

3話 車中が好きな彼（前編）

知らないおじさんと目が合った。

「キヤーツ！」

うつろな目から一瞬にして素に戻った私は、慌てふためきながら目をそらし、私の体に触れてくるゴースケくんの手を振り払った。

「どうした？感じてたんじゃないのか？気持ち良くないのか？」

「だって……となりに見られてるんだもん。恥ずかしいから早く車出して」

「無理言つなよ玲奈。まだ信号が変わってない」

「んもう」

鏡を見なくても自分の顔が真っ赤になってるのがわかる。私は両手を自分の頬にあて、助手席の窓から顔をそむけた。

彼と歯車が狂い始めたのはこの時が大きなきっかけだったかもしれない。

そして、それから別れるまでにはそう時間はかからなかった。

内海剛介くんと付き合い合つて4カ月、彼とのファーストキスはとつくに終わってるけど、初エッチにはまだ至っていない。

実は私がまだバージンだということをゴースケくんにはすでに話してる。

そのせいか、私のことを大事にしてくれているものと思っていた。事実、彼はとても優しいし、エスコートも上手。怒った顔なんて見たこともない。

でも付き合っていくうちに、おやつ？と思えることが徐々に増えてきたのも確かなこと。

そのひとつに、エッチなボディタッチが異常なほど頻繁で、日増しにそれが増えてゆく。

これが上司なら完全にセクハラだけど、彼は恋人だから一応許せ

てはいる。

これほどエッチなゴースケくんなのに、いつもSEXまでには至らない。

いくらバージンの私でも、かたくなに拒んでいるわけじゃないのに。

この日も二人でドライブ中だった。

ゴースケくんが毎回リクエストするから、私はいつもミニスカート。

彼は片手で運転しながら、もう片方の手で私の胸やスカートの中をいじるのが好きで、ドライブするたびに必ずしてしまう行為になっていた。彼はこんなシチュエーションを常に求めているのかと、当然ながら疑問に思っていたのは確かなんだけど。

最初は戸惑った私も、あまりに上手な彼の指テクにハマってしまい、危険運転の怖さも忘れて注意もせず、それどころか身を任せてしまう始末。

自分自身がこんなに淫らな女だと気づいたのがショックくらい、車中でエッチな喘ぎ声を漏らしていた。

そんな中で起きた信号待ちでの出来事。

ゴースケくんの手は私の下着の上から小刻みな刺激を与え、無抵抗な私は彼の愛撫に感じるまま、首を左右に振りながら「あんっ…

…あ、あ、ああ」と恥ずかしい声をあげていた。

そしてまさに、私の座っている助手席側の窓に首を向けた瞬間、少し高い位置のドライバー席から、知らないおじさんが見下ろす形でこちらを眺めていたというわけ。

「あーもうやだ。まだ信号変わらないのかな……」

「玲奈と目が合ったただけだべさ？なんもわかんねえって」

と軽く受け流す彼に力チンときた私は、真っ向から反論した。

「わかるよー。だって向こうは高い角度からこっち見てたんだよ。

全部丸見えなんだよ」

私がムキになってそう言っても、彼の口調に変化はなかった。

「もうすぐ車が動くから気にすんな」

啞然とした私。

「ちよつと！人ごとみたいに言わないでよ。もう私、恥ずかしくて死にそう」

「大丈夫だつて。偶然となりに停まった車なんて、二度と遭うこともないんだから」

「そんなこと言っただって……」

「気持ちわかる。ダンプの知らないおっさんに、自分のイツた顔見られちゃったら恥ずかしいに決まってるし」

「イツてないもん！ゴースケくんのバカッ！」

紅潮したままの顔でふくれっ面になった私。

さすがにこの場の空気がまぶしくなったことに気づいた彼は、車が動き出し始めてからようやく謙虚になった。

「ごめんな。これから気をつけるよ。じゃあすぐどこか目立たないところに車を停めよう」

「うん。その方が……って……え？」

（ということとは、これからどこかでじっくりエッチなことをするってこと？）

私の予想は的中した。ゴースケくんは百貨店の立体駐車場に入り、3階まで上ったあと。店内入口から程遠い位置に車を停めた。そこは照明の灯りもそれほど届かない暗い場所。

まさしくカーエッチをするにはとっておきの場所かもしれない。こんな恥ずかしい思いをしたあとにも関わらず、この時の私は彼の予想できる行動を拒否するどころか、ドキドキわくわく感の方が完全にウエイトを占めてた。

――1分後

キスから始まった車でのエッチは、二人唇を重ねたまま、彼がサイドレバーを引いてシートを倒し、得意の指テクで私を責め始めた。
「あ……ああんっ！んっ！はうっ」

こんなシチュエーションに興奮してるせいもあり、私は簡単にイカされてしまった。

「ダメだなあ玲奈は。イクときはイクって言わなきゃ」

乱れた呼吸がまだ整ってない私に、ニヤツとしながらそう言い放つ彼。

「……ごめん。忘れた」

なぜだかつい謝ってしまう私。

「じゃあ、もういっぺんやり直しだな」

「……え？」

ゴースケくんの指が再び私の大事なところを小刻みに刺激始めた。今度は舌もたくみに使いながら……

（続く）

4話 車中が好きな彼（後編）

やっとロストバージンできそうな彼ができたと思った1985年の秋。

でも結局この恋愛はまともなものとは言えなくて終わってしまったけれど、男という生き物はしっかり隅々まで見極めなければならな
いと気づかせてくれた経験にもなった。

ゴースケくんは優しくかつたし甘えさせてもくれた。
けど……けど変態だった。

21歳の私がまだ子供じみた甘酸っぱい恋愛を夢見ているのもおか
しな話だけど、初めて本気で好きになった人がいきなり変態だっ
たというのはあり得ない。

決して私は自分の理想だけを求めるようなわがままを主張をして
るわけじゃない。

人は誰しも欠点があるわけで、完璧な人間なんているわけないし、
逆にそんな人がいたら私がついてゆけなくて、精神的に疲れること
くらいわかってる。

だけど私の中では変態はあり得ない。エッチな人と変態は違うと
思う。

——なぜゴースケくんは車の中ではばかりエッチするんだろう？

破局のきっかけになったこの日も、コンポから安全地帯の曲、碧
い瞳のエリスが流れてムードは決して悪くなかった。でもやっぱり
車の中。

ここは建物の中の立体駐車場。さつき交差点で横付けされたダン
プのおじさんもない。うす暗くて誰にも見られない安心感もあり、
抵抗感のなくなった私は身をゆだね、彼の舌と指テクに陶醉してい

った。

コンポの曲がC・C・Bのロマンティックがとまらないに代わり、ムードが一変しそうになたけど、主題歌になっているドラマの影響のせいかな、なんだか余計にエッチな気分になっちゃって、

「やん、ダメえ！もういつちゃう…… イッちゃうよぉ」

と恥ずかしい言葉を口に出し、体をのけ反らせてビクビクつと果ててしまう自分がいた。

彼との仲がこじれたのはこの後に起きた出来事だった。

トイレに行きたくなった私は彼にことわって、三階の立体駐車場から百貨店内の化粧室に入ったときのこと。

便座に座りながら『車に戻ったらいいよ』までしちゃうのかな？
』

なんて考えていると、何やら人の足音がバタバタと近づいてきて、洗面化粧台の前で女同士のおしゃべりが始まった。

「すごかったねー。大胆ってゆうかさ」

「うんうん。でもさ、あんなところでするなんて、声聞かれると思っ
てなかったのかな？」

「え？え？……なんかやな予感。もしかして……」

「聞かれるっていうか、見られたが興奮するタイプっているでしょ。
それよきつと」

「えーっ？ウソ！離れたところに車停めてたんだから見られなくな
ったんじゃないの？」

——あ、やっぱり私のことだ

「窓少し開いてたじゃない。あれわざとだよ。ちよつと声を聞かせ
ておいて見られるかもしれないっていうドキドキ感が刺激的なのよ」

——と——11（「；」——1窓開いてた？そんな…

「見られていいなんて思うの、きつと男の方だよね？」

「どっちもよ。女の声も淫乱っぽかったし、声聞かれないのよ」

「あー、だよ。AVみたいな声だったし」

——ちがーう！私はAVなんか出てないーっ！、（、（ノ

「でしょでしょ？普通さ『ダメえ、イツちゃうう』なんて言わないっしょ」

「きやはは（Ｔ　Ｔ）ノーミ　ばんばん！ちよつとマネしないでよ」

「え？もしかしてナオミもエッチのとき、イツちゃううって言うてたりして？」

「言わないよーそんな恥ずかしい言葉。もーあたしに振らないでー」

——？（。　。　——）ショック！ゴースケくんがイクときはちゃんとええってゆうからそうしてただけのになんでよおー！

「でもあのカップル、一日何回エッチしたら気が済むんだろうね？」

「それを偶然何回も目撃した私たちもなんというか（＊　m　＊）ププッ」

——え？え？どういうこと？（「□」；）

「信号待ちのとき、たまたまルームミラーで何気後ろの車を見たときから変だと思ったのよ」

「ちえりはいつも鋭いよね」

「よく見たら誰でもわかるよ。助手席の女がせつなそうな顔で首を左右に動かしてるんだよ。それを運転席の男がニヤニヤ笑いながら見てるんだもの。男の手の位置は見えなかったけど、絶対に女のアソコに決まってるわ。キャ、私やらしいこと言ってる（*v・v）」

——ガ　ΣΣ（。Д。；）　ン！　ま、まさか……まさか横のダンプのおじさんだけじゃなくて、前に並んでいた車にまで見られてたなんて！

私はこの日襲ってきた二度の極度な羞恥心と心の衝撃で頭に血が上り、目まいを感じたせいで、横の壁に体を軽くドンとぶつけてしまった。

「ハッ（。〇。；）誰かいるんじゃない？もう行きましょう」

「私たち、ちよつと声大きかったかな？」

「小声で話したつもりだけど私」

——いえいえ、あんたらは充分声でかかったわよっ！

その後、私は数分間、ここに座ったままでいた。

今すぐここを出たら、今の二人組がまだいるかもしれない。話からすると、間違いなく私は顔を見られている。

そもそもこんな目に遭うのはゴースケくんのせいだ。

エッチするならちゃんと家の中ですればいいのに、外でしかこんなことしないんだもの。

正直、私のバージンをカーセックスで失うなんてイヤ。それは今もそう思っている。

よし、決めた！Bまでなら許していた車の中も、これ以上はもうお断り。

すぐ彼に言おう。車の中でするのはもうイヤだと絶対に言おう。

そう私は意を決して、ゆつくりと化粧室から出た。

更なる悲劇はこのすぐ後だった。

立体駐車場へ歩いて戻る途中、背後から聞き覚えのある声が……

「ちょっとちょっと、あの子あの子、カーエッチしてた子よ」

「シッ！聞こえるってば。わかってるって」

——っ！

私の背筋に氷が走った。

——な、なんでまだいるのよおお！Σ（ノ。。（ノ

（続く）

5話 私に狙われた彼（前編）

1985（昭和60）年

私に彼氏ができたのは二年ぶり。名前は内海剛介っていうの。

彼には最近まで彼女がいて、私もよくそれは知ってたんだ。

なぜなら、彼の元カノは私のバイト先の後輩でもある玲奈だったから。

内海くんは玲奈のバイトが終わる頃、よく彼女を迎えに来てたんだよね。

その時からいい感じの人だとは思ってたけど、さすがに付き合ってる最中の玲奈から彼を横どりしちゃうのはコクだなって思ってた。そんなもんだから、玲奈から突然彼氏と別れたって聞かされたときは、

（ラッキー！これって絶好のチャンスじゃん？）

って心の中ではガッツポーズしてたの。もちろん表情になんか出さないように気をつけたよ。ちょっと危なかったけどね。

自分で言うのもなんだけど、私って隠しごとや争いごとは好きじゃないんだ。

バカだと思われるかもしれないけど、玲奈に直接聞いたの。私、これから彼にアプローチしても構わない？ってね。

本当はこんなことする必要はないんだけど、もしかして昼ドラマみたいなドロドロの三角関係になったりしたら面倒でしょ？そういうの避けたいし。

まあ、でもすんなり玲奈の返事も全然OKってことで、内海くんには私の方から告っちゃったんだ。自慢じゃないけど、私って思い立ったら即行動のできる人なのだ！エヘン。

あ、その前に玲奈が私にひとつだけ忠告みたいなことを言ってた

の。勤務が終わって帰り支度してるときだったんだけどね。

「あのお……まゆ先輩、一応言っておきますけど、ゴーくん……いえ、彼はその……ちよっと変態ですから、気をつけて下さいね」だって。

「……は？」

私、キョトンとしちゃったんだけど、別に驚くって感じじゃなかったんだよね。

「あ、すみません、まゆ先輩。私、余計なこと言っちゃって……じやあお先に失礼します」

言うだけ言って、逃げるようにこの場を去った玲奈。

別に謝ることなんてないのにさ。謝るくらいなら最初から言わなきゃ良かったのにバカな子。ってゆうか、ひよっとして彼女、私に嫉妬してちよっとした意地悪を言わずにはいらなかったとか？

(* m *) ププツ

この時なんだか不思議と笑いが込み上げてきちゃってね。わかるかなあ？

それだけじゃないの。逆にそんなこと聞かされるとね、益々自分に自信が出て来てさ。

(ウフフ……上等じゃない。なんかうまくいきそうじゃん？)

そうなの。実は私も変態なの。私、ノーマルなエッチってなんか物足りないんだよね。きつと玲奈はウブ過ぎるから彼とは合わなかったんだと思う。でも私はへっちゃら。むしろ望むところよ。もし何も仕掛けて来なかったら私から仕掛けてあげちゃうんだ。

そんなワクワク感でいっぱいの中、付き合い始めた私たち。

でも私から告った内海くんの返事が返って来るまでには一か月かかったんだ。

玲奈と別れて間もないし、彼が傷心してたのはすぐ見てとれたか

ら、私も無理強いはしなかったの。電話番号を交換して、その気になつたらいつでも連絡してねって言っただけ。

あとは運まかせだったんだけど、確信はあつたの。

その理由として、玲奈が彼の好みに合わせて服装を選んでるって聞いてたから、私も彼に会ったときは流行りのバルーンミニスリで迫つたんだ。最近はおニヤン子が好きだとも聞いてたしね。

とにかく、エッチな男性を落とすには刺激を与えておかないといけないの。ボクシングで言えば軽いジャブみたいなもんかな？相手が最終的にどうしようか迷つてるとき、必ず私のビジョンを思い浮かべるじゃない？そこが狙い目ってとこね。

新風俗営業法とやらで、ノーパン喫茶ものぞき部屋とかも消えちゃって、世間の男の人たちみんな悶々としてるじゃない？まあ、それはオジサンたちの話で内海くんはそんな所には行つてないだろうけど、玲奈と別れて悶々としてる部分では共通してると思うしね。

そこを私があの手この手でほぐしてあげるの。楽しくなりそう（

・―・）むふふ♪

——あ、なんか私、人のこと言ってるけど自分の方が悶々としてるみたい（*v・v）キヤ。

（続く）

6話 私に狙われた彼（後編）

付き合い始めて一カ月経っても、変態ドスケベな素振りなんて一度も見せない内海くん。

実を言うと初キスはもうしちゃったんだよね。でも濃厚なやつじゃないんだ。

彼がディープを望むなら喜んで受け入れるのに、実際はまるで中学生がファーストキスをするようなしみつたれたキスでね。正直物足りないって感じかな。

確かに内海くんは頼もしい部分もある。

小っちゃなことかもしれないけど、外でごはんを食べるときの場所選びもテキパキしてるし、メニュー選びも即決するし、動きに無駄がないし、優柔不断ってことはないと思うんだよね。一緒に狭い歩道を歩いていても私を絶対車道側には歩かせないの。

まあそれも基本といえばそれまでなんだけど、彼が本当にド変態とは信じ難い部分もあるのよね。

でもさ、表向きは紳士でも、中身はエロエロっていう男も実際は少なくないと思うわけ。だから私としてはまだちょっとは期待してたわけよ。

で、私から仕掛けてもいいんだけど、こんな清纯っぽい付き合い方じゃ攻めづらいのよ。何か都合の良いきっかけがない限りは難しくて。少しでも彼がえつつぱい姿勢とか示してくれたら、待ってました！なんだけどね（＊ m ＊）ププツ

そんな中、絶好のチャンスがやって来たのは更に1カ月経った頃。やっとよね。

私としてはこんなに受け身で辛抱したのなんて初めて。もうすごいストレスだった。

でもね、自分で言うのもなんだけど、ちよつとは成長したのかな？って思ったんだ。

まあ余談はともかくとして、そのチャンスが巡ってきたわけよ。

彼の思いつきで、空港近くにあるちょっとした穴場の駐車場スペースに車を停めて。

真つ暗な夜の空間に、機体全体から発してる照明がとてもきれいでうつとりしちゃう。言い過ぎかもしれないけど、ファンタジーな UFO に見えなくもないみないな？

いくらエツチな私でも、この時は正直そんなこと頭からすつ飛んでたんだよね。

＊
（
ウ
フ
フ
フ
♪

と言いながら車の中に戻った私が、彼と目が合ったのを確認してから微笑んだ。

「ふうん……」

「なんだい？ふうんて」

「いろんな場所いっぱい知ってるのかなあって」

「そう？それほどでもないよ」

なんか含みのある言い方の彼。ホントのところ、『今まで付き合い合った女の子もみんなここに連れて来てたの？』って聞いちゃうところだったけど、全てのムードをぶち壊すほど私もバカじゃないから、これ以上、余計なツツコミは入れずに口をつぐんだわ。

ちよつとスネたりするのも効果的かもしれないけど、時間の浪費に過ぎないと思って。

でもね、目的のために私が黙ってばかりもいられないじゃない？ここは良い意味で大胆にならないといけないと思ったわけよ。

「ねえ、キスして」

もうこの場面は直よね。小声で可愛く言ってみたの。

彼は返事もなしにそつと顔を近づけて……。誘惑作戦成功！

——長いキスだった。うん、結構長かった。

でも……、でも物足りない。こんなキスじゃダメ。

彼は唇からその中へは入って来なかった。明らかに彼の呼吸は乱れ始めているのに。

そして私もこんなに期待してるのに……

このままでは熱くなりかけてる私の思いがまたしても不完全燃焼になる。

ここが攻めドキとついに判断した私。

「う……」

と声を漏らしたのは内海くんの方。それは私が強引に舌を入れたせい。

なんて純情なんだろう。二十歳も超えた大人なのにこの程度のこととで驚くなんて。

彼が本当にドスケベで変態なのかわからなくなってきたけど、玲

奈の証言もあることだし、ここは一応、彼は純情な変態ということ
で納得して攻め続けるしかないと思ってね。

ちよつと大胆かもしれないけど、彼の下半身に手を伸ばしてみた
の。少し触れたただけなんだけど、もうカチカチになってんのよ。し
めたと思ったわ（＊ m ＊）ププツ

上半身ではキスで舌を絡ませたまま。下半身では私が彼の熱い部
分を指でゆっくり撫でてあげたら彼の鼻息が更に荒くなるし、

「うう…うっ、んあっ…んっ」

って絶えず喘いじゃってね、私も徐々に興奮してきちゃったんだ。
そしてついに、期待していたことが…起ったことは起ったんだよ
ね……

（続く）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5276k/>

童貞じゃられない

2011年7月8日03時22分発行